紅葉狩の刻

須藤勝見

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅葉狩の刻

【Ｎコード】

Ｎ３８９４Ｚ

【作者名】

須藤勝見

【あらすじ】

２００９年、初秋――――　古代より鬼女紅葉の伝説が色濃く残る長野県の寒村、水瀬村。　そこは二年前に起こった連続殺人事件の舞台となった村でもあった。　家庭の事情で水瀬にある高校に進学した柏木行幸（かしわぎみゆき）は、無理やり入部させられたサークル「フラタニティ」で、主催にしてお嬢様の斎宮葵（いつきのみやあおい）にこき使われて慌ただしい毎日を送っていた。しかし、行幸のそれなりに平穏で充実した学園生活は、一人の転校生の登場により、徐々に壊れ始める。　不審な行動を繰り返す転校生、これまで仲間だと思っていたサークルメンバーたち

の秘密、学外の不良たちとの騒動――――　様々な出来事を乗り越え、鬼女紅葉を祀る例大祭を迎えたその日、行幸の友人の一人が死体となって発見される。　それが、これから始まる大量連続殺人事件の幕開けだった……　「ひぐらしのなく頃に」リスペクトのオリジナル伝奇推理小説

【序】（前書き）

この作品は「ひぐらしのなく頃に」リスペクトの伝奇物推理小説の内、出題編です。
まだ出題編自体完結してはおりませんが、行幸たち「フラタニティ」のメンバーの物語をお楽しみ頂きながら、「作者」の仕掛けた謎を推理して頂ければこれに優る幸いは御座いません。

とは言うものの、推理が主題の作品ではなく、あくまでハラハラドキドキの青春群像劇としてお楽しみ頂ければと思います。

後、この作品は架空の物語であり作中に登場する地名や人名に関しましては現実に存在するのものとは異なります。建前としてはそういう事になっています。
何卒、お汲み取り頂けますようお願い申し上げます。

【序】

【序】

>i37066<ruby><rb>4629<

紅葉狩</rb><rp>（</rp><rt>もみぢがり</rt><rp>）</rp></ruby>

「拾五将軍惟茂（よごしゃうぐんこれもち）、紅葉（もみぢ）がりの時山中にて鬼女（きぢょ）にあひし事、謡曲（ようきょく）にも見へて皆人のしる所なれば、ここに贅（ぜい）せず」

今昔百鬼拾遺、鳥山石燕

【追記】

※捜査本部より注

【以下、－０－は冒頭にあるものの手書きで記されており、内容的に後になって付け足されたものだと考えられる。－１－と表記された部分以降が本来の書き始めであり、特別に注釈が無い限りはＰＣ、及びそれに類するデジタル機器にて直接入力されたものであると推定される】

―０―

僕にとって、斎宮葵（いつきのみやあおい）は、地獄からやって来た天使みたいな女の子だった。

容姿端麗、成績優秀、スポーツ万能、毒舌三昧、家事最低、村一番のお嬢様で――――紅葉の継承者。

葵の命じるがままに奔走する日々の中で、僕はこれまでの人生で獲得した色々なものをさらけ出し、点検し、整備し、捨て去る事を余儀なくされた。

葵は僕にとっては鏡みたいな存在だったのかも知れない。だからこそ、葵と過ごしたこの半年間は、僕にとっては苦労の連続であると同時に救いでもあったのだ。

だからこそ僕は彼女のそばを離れることができなかったのだろう。

僕がその気になれば、いくらでも逃げ出す機会はあったはずなのに、葵と彼女を取り巻く環境とそしてその周りで起こる全ての出来事に背を向ける事が、僕には出来なかったのだ。

もちろん、逃げたいのであれば、今からだってそうすることは出来る。全てを見なかった事にして、これから起こるであろう出来事を他人事であると決め込み、独りで物語から退場する事は出来る。

でも、僕はそうはしない。

僕がこうして物語を紡ぐのは、僕が今まで生きてきた人生って奴の積み重ねからの必然で、それ以上の理由はない。

誰だって、生きる目的はあるにせよ、生きていること自体に理由なんていうものは存在しないのだ。

僕たちは生きる為に生きているのであり、生き残っていくために思考する。そして、思考する為に物語を紡ぎ、物語を存続させるために出力していく。それ以上でも、それ以下でもなく、だからこそ僕たちの全ては物語の中に含まれている。

我物語る、故に我有り。

物語られる事、後世に伝えられる事、他人に伝達される事、それだけが真実として歴史に積み重なっていく。いくら物語の輪郭を撫でて、外側から全体の形を把握し、物語の中に潜む事実を語ろうとしても、それは結局真実ではない。郡盲像を撫でるが如く、本当の出来事、事実、真実と言うものは、物語の外側ではなく、内側にしか存在しない。

物語られる事、表現される事、出力される情報だけが、この世界の全てなのだから。

＊＊＊

これから始まるのは、一人の可哀想で小さな少女、斎宮葵の物語だ。

そして、葵の周りに集まった人々の物語だ。

葵は、そこに居るというだけで周囲に影響を与える、どうしようもない程悲しいカリスマ性を持っている。

葵自身が動かなくても、むしろどれだけ停滞したいと考えていても、周りが彼女の影響を受けて自動的に動き始める。

【いついかなる時でも、状況その物が自身の周りを周回するが為に、中心に居る事を余儀なくされる少女】

それが、斎宮葵の本質だ。

だから、僕だけが特別なんていうことはありえない。

僕だけが葵の影響から逃れられるなんていう事は、有り得なかったのだ。

なのに、僕はそれに抗おうとした。葵を縛る見えない力を振りほどき、あまつさえそこから葵を助け出そうとした。葵が本当は何を

考えていたのかなんて知ろうともせず、ただ盲目的に自分の可能性を信じ切って、自分だけは葵の事を分かったつもりになっていた。

――――他人の考えを理解するのはとても難しい事だ。僕たちは、自分の事だってまともに理解できない。他人を理解するなんて、おこがましいにも程がある。だけど、それでも人は他人と分かり合わないと（少なくとも、分かり合ったフリをしないと）生きていけない。

だから、僕たちはコミュニケートする。

文字で、口話で、手話で、視線で、肌を重ねて。情報を交換し、ソーシャルを構築し、ソフィスティケイトし、コミットしていく。それが誤解であろうと、錯覚であろうと、お互いに分かり合えているという確信がなければ、とても僕らの複雑に進化しすぎた社会（セカイ）を維持する事なんてできないのだ。

そして……多分、僕は葵を理解することに失敗した。

分かっているつもりで、葵の事なんてまるで理解してなかった。あいつがどんなつもりで僕を見つめていて、どんな気持ちで僕の手を握っていたのか。

分かったつもりで誤解していて、誤解であると気がつきもせず、そもそも人と人との理解なんて錯覚であるという心構えも無かった。

傲慢だったのだ。

葵だけじゃない。この水無瀬村にやってきてから半年、僕が知り合った全ての人間の事を、僕はまったく理解出来てなどいなかった。

毬瀬初音（まりせはつね）、九仗宴（くじょううたげ）、東条真奈美（とうじょうまなみ）、鷲尾末摘花（わしおみつか）と明石蛍（あかしほたる）、九執曜（このふしあきら）、真名井修二（まないしゅうじ）、真崎透吾（まさきとうご）、松田総司（まつだそうじ）……

誰も彼もが、僕が追いつくよりも先に手の届かない場所へ消えていってしまう。いや、むしろ、僕の方が後ろに下がってみんなから

離れてしまったのかもしれない。

彼我の距離感は視点の立脚点によって異なる。僕らの社会には、絶対の不動点など存在しない。

……フーコーは一体どこに振り子をぶら下げたのか。その振動する弦の遥かな延長には一体何があったと言うのか。

それを理解する為に必要なことを、僕はまだ学び終えてはいない。

だから僕は物語る。この物語は記録・記憶であると同時に追憶であり、僕の周りに起こった出来事をより良く理解する為のサブテキストでもある。

今何が起こっているのか、これから何が起こるのか、それを理解する為には、まずこれまでに何が起こったのかという事を理解しないといけない。

何処まで遡るかと言えば、僕がこの水無瀬高校に入学した所からが一番なのだろうが、ほぼ確実に、僕に残された時間はあと数日しか無い。ひょっとすると、数時間も無いのかもしれない。

全てを物語る時間は、もう残されてはいない。

だとすると、やはり語り始めは、あの黒衣の不気味な少年、九執(このふし)曜(あきら)がこの村にやってきた所からと言う事になるのだろう。

九執が何の目的でこの村にやって来たのかは未だに分かっていないし、その後僕たちに降り掛かった惨劇の数々に、どう関わっていたのかも分からない。

ひょっとしたら、本人が言う通り、まったく何の事件にも関わっていなかったのかもしれない。事件は起こるべくして起こり、まったく自動的に進展し、僕には何の手も打つことは出来なかったのかもしれない。もちろん、そうではなく、九執こそが全ての事件の犯人だと言う事だって考えられる。

未だ――――九執曜についての真実は、全て薄暗い闇の中で、埃にまみれて眠っている。

＊＊＊

この「物語」を読む人たち（恐らくは警察関係者か、もしくは後世の物好きな連中か）に、一つだけお願いがある。

僕は基本的にこの物語で起こる出来事に嘘はつかない。僕が見たもの、聞いた事をありのまま記述する事を心掛ける。だから、もし全てが後手に回り、僕が何も出来ずに物語から降りるようなことがあるならば、僕の変わりに考えて欲しいのだ。

今から僕が物語ろうとしている、現在も進行中のこの事件、すなわち「水無瀬村連続殺人事件」とは何だったのかという事を。

一人ではたどり着けない真実も、多くの人間によって精査されることで明らかになるかもしれない。もしくは、こうして記載する事で事件の新しい糸口がみつかり、僕を救う事になるのかもしれない。だから、残された僅かな時間で出来る限りの事を書き残す。

東条真奈美の事、鷲尾末摘花の事、九執曜の事、紅葉伝説の事、鬼と呪いの事、殺された沢山の人たちの事、僕に取ってかけがえのないフラタニティの事、そして、何より斎宮葵の事。

彼ら、彼女らの事を書き記すことにより浮かび上がってくるはずの真実。そして、その真実が浮かび上がってきた時に僕が取るべき最適の行動。

こうして物語る事により、その真実と答えが僅かでも浮かび上がってくるかもしれないと言う事が――――

今の僕に残された最後の希望だ。

【ACT01】に続く

【ＡＣＴ０１】フル・フラタニティ～その１（前書き）

こちらのＡＣＴ０１の前に【序】が御座います。
出来ましたら、そちらからお読み頂けますようお願い申し上げます。

【ACT01】フル・フラタニティ～その1

【ACT01】フル・フラタニティ

－1－

「今日からしばらくは、図書館の棚卸しをしなさい」

いつも通り、何の感情も感慨もなく葵が口にしたのはそんな台詞で、僕はとりあえず口から飛び出しかけた怒声を必死に押しこらえた。

目の前には小さな子供ならベッド代わりに出来るのではないかと思われるぐらいの巨大なマボガニーのデスクが鎮座しており、顔が映りこみそうな程に磨き上げられた艶っぽい天板の上は、高価そうな万年筆や上質な便箋、古いタイプライターなどレトロな事務用品で飾り立てられている。

そして、その向うで両足をデスクの上に放り出し、両手を頭の上で組んで有るのか無いのか良く分からない胸を誇示するようにふんぞり返っている、ハイソなブレザーの制服をまとった一人の少女。

今日は午前中で授業が終了し、昼食を取ってから直ぐに集合したので、窓から差し込む日差しは壁に掛けられた絵皿ではなく、立派なチェアに沈む葵に降り注いでいた。ツインテールからほつれた細い毛が光に反射し、光のネックレスのように葵の首元に降り注いでいる。

僕は、葵の見下すような、肉食獣のような鋭いまなざしに、ともすれば目を逸らしたくなる欲求に耐えながらながら、深く、二、三度深呼吸する。そうして、何とか自分が平静を保っているという確信が生まれるまでたっぷりと時間をとった後で、最大限冷静を心がけ、ゆっくりと僕は口を開いた。

「……なぁ、葵」
「私の名前には様をつけろといつも言ってるでしょうが、このチビ野郎」
「話し聞く前に速攻で身体的特徴をあげつらっての暴言かよ！！？というかそもそも今まで一度も様を付けろとか言われた覚えはねぇぞ！！？」
「今不意に思いついたのよ、ハゲ野郎」
「ハゲてねぇ！！！僕にどんだけの問題点があったとして、断じてハゲだけはねぇよ！！って言うかそういう問題じゃねぇ！！」
「なに？死に掛けのカバみたいに発奮して。もっと別の部分の欠陥を糾弾して欲しかったの？それとも……あ、アレね。私に卑猥な事を言わせるつもりね、このド変態が」
「別に僕は卑猥な所に欠陥を抱えてもいねぇよ！！！」

会話がまったく前に進まない。それどころか、後ろ向きに全速力で展開している。
葵がこの僕の一体どの部分に欠陥を抱えていると思ったのかについては、今度時間があるときに徹底して追及しなくてはいけない、男としての抜本的尊厳に関わる重要な問題だと思われるが、今現在解決しなくてはいけない問題はそこではない。
断固として、そこではないのだ。

「……お前義務教育受けてるよな？学校という小社会を生きていくうえで必要な人間関係の構築方法とか、コミュニケーションの取り方とかはきちんと学習してきてるよな？僕は、『最近ちょっと活動が過酷すぎるので少しばかりセーブしてくれませんか？』って言ったんだよ。『ぜひ今日の活動を発表してください』ってお願いしたワケじゃねーんだよ。そこんとこ分かってんのか？？」

僕の必死の抗弁を、聞いているのか聞いていないのかも良く分からない葵が取って見せた態度といえば、ほんの少し――僅か2ミリほど左の眉毛を動かしただけだった。

「ねぇ、みー？私はご覧の通り多彩な人間だけれども、そんな私でもね、雄豚の言葉を解するにはまだ至ってないのよ……ゴメンね？」

「ひどく凡才な僕は徹頭徹尾日本語で話をしてたっつーの！！」

っていうか、さらっと謝っちゃてやがるが、僕が欲している謝罪も、やっぱり断固としてそこではない。

「……本当に、ほんとーにもう限界なんですよマジで！毎日毎日労役もかくやと思われるような重労働にさいなまれるのは辛いんですよ。お役に立ちたくないとは言いませんから、なんとかもう少しだけ手加減してもらう訳には行きませんかねぇ……？」

涙を流さんばかりの哀願である。泣き落としである。

大の男が（といっても高校生だが）、平身低頭してほんのわずかな猶予を請うその姿に、心打たれない者などが果たしてこの世の中に存在するだろうか？小動物がプルプルと震えるがごときその姿に、哀れみを覚え無い者などがこの世に存在するだろうか？

「集合時間は、３０分後よ」

いた。ここに。

罪悪感などかけらもなく、取り合うそぶりすらなく、歴然かつ毅然として黒檀のデスクに足を放り出して、つまらなさそうに自分の爪を眺めていた。

――分かってはいたのだ。この半年で、十分に学習してはいた

のだ。この女が僕の言う事に少しでも耳を貸すハズが無いと言うことぐらいは。
水無瀬高校非公認サークル「フラタニティ」現行主催。水無瀬村一番のお嬢様で、眉目秀麗・成績優秀・スポーツ万能の完璧超人。この斎宮葵（いつきのみやあおい）が、僕の願いなんかを聞き届ける訳など、まったくもってなかったのだ。
本日の（そしてこの半年間で考えると数百回目の）嘆願を無残に打ち砕かれて、僕はがっくりと椅子に崩れ落ちた。
僕の対面に座り、僕と葵のやり取りをのほほんとコーヒーを飲みながら眺めていた九仗宴（くじょううたげ）が、右隣でスケッチブックに向かってなにやらドローイングをしていた毬瀬初音（まりせはつね）に向かって振り返る。

「ねー、言ったでしょー？みー君が勝てる訳無いんだってば」

椅子の上に胡坐をかき、体重を後ろに掛けて後脚二本でバランスを取るなんていう器用な真似をしている宴に、なにやら難しそうな顔でスケッチブックとにらめっこしていた初音が、テーブルの上に鉛筆を戻して、にっこりを微笑を返した。

「うーん、今日はもうちょっと頑張れると思ってたんだけどなぁ」

勉強や絵を描く時やＰＣを使う時だけつけているという眼鏡を外して、ほつれた髪の毛を耳の後ろにかきあげ、初音は僕に向き直る。

「でもまぁ、いつもよりは頑張れたんじゃないかな？」
「頑張ったから良いとか言う話じゃねぇよ……」

大きく天を仰ぎ、逆さ向きに部屋の中を見渡しながら、僕はため息とともに呟いた。

イギリスの上流階級の居間を思わせるような豪奢な一室。
床一面にカラフルで細密なデザインの絨毯が敷き詰められ、歴史を感じさせる古びた暖炉に、シャンデリア。部屋の真ん中には大きな黒檀の長方形のテーブルが設えられており、その周囲に黒皮製の上等な椅子が並べられている。テーブルの真ん中には色鮮やかな花が飾られており、壁に掛けられた印象派の絵画や絵皿などと共に部屋に彩を与える。
僕と初音、そして常人離れしたバランス感覚で普通の椅子をロッキングチェア代わりにしている宴の前には、ウェストビレッジだがサイドエッジだかハリウッドだかいう名前の高そうな陶器のカップが置かれており、入れたてのコーヒーが芳香を燻らせていた。
そして、暖炉からテーブルを挟んだ壁際には、大きな黒檀製のデスクと黒皮のチェアが置かれており、今やそこは不釣合いに小柄なお嬢様の独占有地帯となっている。
この、おおよそ高校生が立ち入るにふさわしいとも思えないブルジョワチックかつアンティークな趣味のお部屋が、我らが「フラタニティ」の部室である。
高校の一サークルが占有するには全くもって不釣合いな部屋だが、その正体は僕の目の前でまかり間違うとパンツまで見えそうなほどふんぞり返って座っている葵の実家が所有している別宅の一室で、この部屋を部室にしておきたいがためだけに、葵は「フラタニティ」を非公認のままにしているとか何とか。
まったく、全てにおいて一般常識が欠落しているお嬢様だ。
この、斎宮葵、毬瀬初音、九仗宴と僕に、関屋真木というスポーツバカを合わせた5人が、「フラタニティ」の現在の全メンバーという事になる。
そもそも「フラタニティ」と言うのは海外の大学とかにある相互互助組織で、いわゆるボーイスカウトとかボランティア団体の類らしい。その出自には、フリーメイソンだとか神秘主義だとかキリスト教的友愛の精神がうんたらかんたらと言った理念が色々とあるみ

たいだけれども、とりあえず僕の所属する「フラタニティ」に絞って言えば、要するに何でも屋である。

何でも屋、と言うよりは問題を引き起こす事の方が多いお騒がせ団体として先代までは猛威を振るっていたらしいが、斎宮葵が現行主催になってからは、学内は元より水無瀬村に発生する様々な問題（や雑用を）解決する、ボランティア団体として善行を積み上げて行っている。まぁ、善行を積み上げていっているのは僕らで有って、断じて葵では無いのだが。

しかし、そんな内情など分かりはしない学生や村人の感謝の念は何故か葵のところに向けられるようになっていて、それを調子に乗った葵がまた僕らを酷使する、と言う搾取構造が完璧に出来上がってしまっていると言う訳である。

理不尽極まりない。

そもそも「フラタニティ」と言う名前は「フレンドリィ」とかの語源になったラテン語で、「友愛」と言う意味らしいのだが、少なくとも僕に対する葵の態度には友も愛も無い。それどころか、悪意と敵意と軽蔑と侮蔑と侮辱で出来上がっているような感すらある。

まかり間違っても、善意とかボランティアだとか言う単語とは縁遠い所で人生を送ってきていたこの僕が、なんで「フラタニティ」なんていうものに所属して、ガレー船につながれた奴隷もかくやと思われるような酷使労働を送っているかと言えば、入学当初にしでかした様々な浅慮で短気な行動が原因なのだが、まぁ、その話はこの際どうでもいい。

問題は、毎日毎日懲りもせず飽きもせず、校内清掃から河原のゴミ拾い、老人会のヘルパー、買出し、壊れたボイラーの修繕、ケンカの仲裁、農作業の手伝い、お祭りの運営と言った奉仕活動に従事させられる僕の我慢の限界が、とっくの昔に天元突破していると言う点である。

何度となく待遇改善を上訴しているのだがご覧のような有様で、このままでは間違いなく僕は葵に殺されてしまうだろう。日本の高

校生の死亡事由として世にも珍しい「過労死」が統計表に記載されるのも、そう遠い未来ではないはずのだ。
しかし、ここでどう抗弁しても葵の決断を覆す訳には行かない以上、僕の取れる手段はただ一つ！
古今東西を問わず、労働者が行使してきた最大の権利を僕も発動させるのみ！

……サボろう。こいつがどっかで目を離した隙に、とっととズラかってサボタージュを決め込もう。

そもそも、サボタージュの語源はサボ（木靴）で機械をぶっ壊した所から来ているらしいので、当初は実力行使を伴うものだったようだ。木靴で殴り殺されないだけ、葵は僕の寛大さに深く感謝してもいい。僕は、あくまで紳士なのだ。
と言うか、サボタージュの語源が本当に木靴による機械破壊だとすると、機械が敷衍した産業革命以降の労働者に当てられる単語って言うことになる。つまり、サボタージュは神から与えられた生予のものである「職業」が、労働貨幣として資本家に搾取されるようになってから初めて出てきた概念って事になるよな。
それまでは、サボりなどというモノはなかった。職業は生きていくと言う事自体の証だったから、そこから離れる事はできなかった。それを組織化し、搾取するようになって、初めて人は仕事をサボる事が出来るようになった訳だ。

……どーでも良いし、どっちかって言うと間違ってそうな考察だけど。

更に言うならば、労働者の権利はストライキで、サボタージュは別に権利でもなんでもなかったな。
いや、今大事なのは僕がこれから行う神聖な労働者の権利行使が

ストライキなのかサボタージュなのかという事ではない！暴虐不人を極め、人を人とも思わぬ暴君っぷりを発揮するこのチビのお姫様に、僕にも僕の事情があるということを深く理解させなければならないのだ、ああ、そうだとも。

そうと決まれば話は早い。とりあえず、ここは恭順の意を示して相手を安心させて、隙を見つけて逃げ出すだけの簡単なお仕事に取り掛かろうではないか同志諸君。

「……わーったよ、図書館の棚卸しだな。行きゃぁ良いんだろ行きゃぁ」

とりあえず毒づいたフリなんかをしながら僕は立ち上がってカップに残っていたコーヒーを飲み干した。相変わらず、初音の入れるコーヒーの美味さは天下一品だと思う。毎回コーヒーミルで挽いているお陰で時間が掛かるのが難点だが、それを補って余りある、専門店でも早々味わえない深みがある。そもそも、僕はコーヒーは苦くて嫌いだったのだが、初音が淹れてくれたそれを飲んでからはコーヒーに対する価値観が一変した。昔から色んな所で書かれていたり言われていたりしたが、コーヒーとは香りを楽しむものだと言うことが、実感をもって理解できたのだ。

まぁ、女の子が淹れてくれるコーヒーって大体美味しいんだけれど。

カップをソーサーに戻し、僕は初音と宴に目をやった。二人とも空気を読んですでに出かける準備を始めており、自分の前に置かれたコーヒーをちょっとずつ片付け始めている。

が、当の葵だけはまったく動く気配はない。それどころか、さっきより更に深くチェアに沈みこんで再び無表情で天井の辺りを眺めている。このままもう少し沈み込んだら、スカートがその内部の白布（推定）を外部の目線から遮断するという目的を完全に放棄してしまうだろう。

ヤバイ。いろんな意味でヤバイ。
このまま放って置くという選択肢の誘惑には抗いがたかったが、僕はあくまで健全な高校生男子としての領分を守るべく、放心している葵に注意を勧告した。

「何ボケーっとしてんだよ、お前もさっさと出かける準備しろよ」
「……は？」

僕が血を吐く思いで貞操を守ってやっているというのに、そんな僕に対しての葵の返事は、これ以上ないぐらいに小バカにした感じだった。

「なんで私が出かける準備をするのよ？」
「……あ、いや、そのですね。先ほど仰られたように、図書館の棚卸しを……」
「行かないわよ私は」
「……あぁ！！？」

ちょっと待て、今とんでも無い事を口にしたぞこの女。
図書館の棚卸しなんていう、単語を聞くだけで筋肉痛になりかねない重労働を他人様に押し付けておいて、自分は部室でダラけていやがるおつもりですか？？この世の全ての労働は自分とは関係なく、優雅にコーヒーを楽しむのが崇高なる義務だという訳ですか！？

「いやいやいや、待ってくださいよ斎宮さん、なんかおかしくありませんか？おかしいですよね？間違ってますよね？？僕たちを酷使しておいて、自分だけスイーツなアフタヌーンティーを楽しんじゃったりするようなおセレブな立場に安逸となさってご満足ではありませんわよね？」

怒りのあまり、お嬢様口調になってしまっていた。
流石に本気で少し怒り出していた僕に、聞いているのかいないのか、葵はほんの少しだけこちらに注意を向けた。具体的に言うと、数ミリだけ目線をこちらに向けてきた。

「私は私でやる事あるのよ」
「何をだよ」
「色々よ」
「はっはー、なるほどねー、色々有るのかー、それはしょうがないよなー、色々有るんだもんなー、って納得するかボケ！！！説明しろ！懇切丁寧に一から十まで誠心誠意説明しろ！！」

怒声を張り上げる僕に、葵は実にめんどくさそうな表情を浮かべて見せた。そうして、中空を眺めてなにやら思考した後で、小さく口を開きかけて……思い直して口を閉じた後、実にめんどくさそうにため息をついた。

「初音」

葵がポツリと初音の名前を呼び、コーヒーカップをトレイの上に載せて片付けていた初音が、ぴくん、と体を起こす。

「あ、えっと……そのね？ほら、葵ちゃんって村のお仕事とかもやっているじゃない？」

葵の代わりに口を開く初音。どうやら葵は初音に説明をブン投げたようで、仕方なく僕は初音のほうを振り返った。

「やってるな」

やってる。それは間違いない。
僕だって村の仕事の一つや二つは手伝った事がある。水無瀬村には、徹底的に人手が足らないのだ。

――――そもそも、僕らの高校があるこの水無瀬村は、長野県の北端部にある人口２０００人に満たない小さくて狭い寒村だ。日本の辺境にある農村の例に漏れず、若者の流出と村人の高齢化で、ゆっくりと廃村へと歩み続けている、ほぼ限界集落である。
細々とした農業と、ごく僅かな観光資源と、地方助成金が命綱なこの水無瀬村が、村としては決死の大博打を打ったのが、大体１０年程前の事。このままでは遠からず廃村になることが確定し、周囲の村々がその運命を受け入れていったのに比べて、当時の村の首脳陣は、村の活性化のために学校を誘致する事にしたのだ。
確かに、若者を呼び込むと言う点では分からないでもない発想だったが、長野市内からバスで2時間以上も掛かり、コンビニも無いような辺境の地に学校を設立しようなどと言う奇特な学校法人は一向に現れず、誘致活動は困難を極めたらしい。しかしまぁ、紆余曲折を経て関西に有る大きな私立の学校法人と契約がまとまり、分校と言う形で水無瀬高校はスタートした。
最初の一年こそ運営は苦しかったらしいが、いつの時代にも、下世話な誘惑の少ない自然に満ち溢れた場所で子供を育てたいという両親は後を絶たないようで、二年目からは生徒の数も増え始め、今や倍率が3倍を超える事も少なくないちょっとした有名校の一つにまで上り詰めた。まぁ、倍率が高いのは、募集生徒数に限りが有る、と言う点も大きかったのだけれども……
そんな感じで外からの学生も多い水無瀬高校だが、僕のように外からやって来た人間もいれば、ずっと村の中で生まれ育ってきた生徒も居る。葵、初音、宴の3人はそんな生粋の水無瀬っ子で、狭い村の事だから、なんだかんだで遠縁の親戚だったりするらしい。
しかし、3人の中でも、葵は別格である。

葵の実家、斎宮家は水無瀬村の紅葉神社の神職である。昔は村の領主筋だったらしく、民主制に移行して選挙で村長が選ばれるようになっても村の中の家柄、格式は一番高い。村長を差し置いて、役場や村会を含めた村の運営を取り纏めのような事もやっているらしい。そんなもん、たかだか一家が継承しなくても、村長やら役場の職員がやればすむ事なのだろうが、そこはそれ。田舎の寒村の人間関係というのは、中々余人には理解しにくい物がある。

そして、葵はその斎宮家の人間というだけではなく、当主でもあるのだ。

詳しい事情は聞いて無いし聞こうとも思わないが、2年前のあの事件……誰もが心の底に抱えながらも決して口に出そうとしないあの事件の際、葵の両親は共に亡くなってしまっている。一応祖母は御健在らしいが、斎宮家当主として村を取り仕切るだけの体力は既になく、孫娘の葵に当主としての座を譲り渡して、実質寝たきりで隠遁している。

つまり、葵は「フラタニティ」の現行主催であるというだけではなく、高校生の身でありながら、水無瀬村の相談役も兼ねて居るという訳である。

「今日も、ちょっと色々と村のお仕事があるから、私たちだけで図書館のお手伝いをする事になったの」

僕の補足説明を除けば、初音の説明はまったくもって端的だった。そう言われると僕としてはなんとも抗弁しにくいが、それでも一度振り上げた拳のやり場に困って、僕は台詞を継ぐ。

「いや、まぁそりゃ村の仕事も分かるけどさ、後回しに出来ねーの？図書館の棚卸しってアレだろ？夏休みが開けてから図書委員がずっとやってる奴だろ？ちょっとでも人手があった方が助かるんじゃないか？」

僕の台詞に、葵は深々とため息をついて、いよいよチェアに沈み込んでいく。なんかもう、スカートの布地が実にきわどい所のギリギリまできている。太ももなんてフルオープンだ。このままではヤバイ。まずもって僕の理性がヤバイ。

かといって別に注意をするような無粋な真似も視線を外すようなもったいないこともせずに見つめる僕に、葵が天井を眺めたまま口を開いた。

「今はね、ちょっとデリケートな時期なのよ」

とてもデリケートな状況であるという事には深く同意せざるを得ない。

「選挙が終わって、政権変わったじゃない？」

「選挙……？あぁ、参院選？」

そう言えば、あのドタバタと混乱を極めた夏休みの終わり、僕らがとんでも無い大騒動に巻き込まれていた裏で、いつの間にか日本の舵取りが大きく傾いていたのだ。いや、どっちかって言うと参院選こそが世間一般的には表で、しがない長野の寒村の高校生の青春の一幕など、どうでも良い事ではあったのだが。

戦後から５０年続いた自○党支配は終わりを告げ、○主党が政権をとった。それが意味する事がはっきりとするのはまだ先の事だろうけれども、とにかく、何かが大きく動いたのは間違いない。

「が、それがどうしたっつーんだよ」

「本当に貴方はバカね」

葵の無表情が崩れ、侮蔑が生まれた。こいつはまったく、人をバ

カにする言説と惨めにさせる表情のバリエーションだけは、本当に多彩なのだ。

「この村の予算の半分近くは地方助成金で賄ってるのよ？その助成金を獲得して維持して吊り上げる為にこれまでどれだけ根回しやら接待やらをしてきたと思ってるの？それが一回白紙に戻って、予算削減だの何だのといった議論を押しのけて、関係値を作り直さないといけないのよ？大変なのよ」

具体的には何がどうなってるのかさっぱりだったが、とりあえず大変そうだという事は分かった。

「大体においてそんなのは村長やら役場の人間の仕事で、葵が心配したり駆けずり回ったりする問題じゃ無いだろ」と言う台詞は、流石に口には出来ない。この半年で、葵の村の中での立場と役割ぐらいは、理解できている。

だから、代わりに僕は溢れる気持ちを押し殺してため息をついた。

「分かったよ、棚卸しはコッチでやっとくから、お前はお前でメンドーなこと片付けとけ」

「言われなくてもそうするわよ」

相変わらず可愛げのない返事である。

しかし、葵のその小さな体の狭い両肩に乗っかっているものの重さと大きさを思えば、多少ヤサグレるぐらいは許容範囲として認めなくてはならないだろう。それだけの重責を、こいつは一人で抱えている。

だから、悪態やドSな態度を僕のほうが大人になって飲み込むとして、とりあえず葵には労いの言葉を掛ける事にした。今の僕には慈愛の心が満ち溢れている真の紳士と言っても良い！

「あんま無理すんなよ。僕らでは手伝え無い事も多いだろうけど、やれる事はやるからさ」

僕からの優しい言葉が意外だったのか、葵は今日始めて、無表情と侮蔑と見下し以外の表情を見せた。きょとん、と驚いた表情を浮かべてみせたのだ。

「……珍しいわね。貴方がそんなこと言うなんて」
「そりゃ、お前がいつも頑張ってるのは良く知ってるからな。色々大変だと思うけど、お前には僕たちが付いている」
「あ、ありがと……」

どう返事したものか、あっけに取られて口ごもる葵。
照れて――――ない。あからさまに不審がってる。
そんな葵に、最大の笑顔を浮かべる僕。

「辛くなったらいつでも言えよ。一人で頑張りすぎるなよ」
「……ええ」
「助けて欲しくなったら、意地を張らずに素直にそう言うんだぞ」
「分かってるわよ」
「あと、さっきからずっとパンツ見えてる」
「死ね！！」

―２―

大勝利である！
最初こそ、他人様を戦地に送り込んでおきながら自分は司令部でのうのうとしている無能な司令官のごとき葵の態度に腹も立ったが、冷静になって考えてみれば、小うるさいお目付け役が居ないと言う事でもある。これでいつでもサボって抜け出す事ができると言うも

のだ。
その上、葵に対してのアドバンテージとも言うべき辱めを与えると言う作戦も成功した訳で、これは対葵戦における偉大なる快挙と言って良いだろう。
やっぱアレですよ。教育と条件付けが重要だと思う訳ですよ。こうやって、僕にパンチラを見せると優しくされると言う事をインプリティングしていく事により、葵が気弱になるたびに僕に対するサービスシーンが増えていくと言う、ラッキースケベなシチュエーションを演出しようと言う崇高なる作戦な訳ですよ。
人間誰しも人に優しくされたい瞬間と言うのは存在する訳で、そう言う時に優しくされた記憶を引っ張り出して、同じ行動をとってしまうというのは、これはもう致し方ない事だ。
今後こういった条件付けを繰り返していく事により、あの悪魔をいつしか屈服させる事も不可能ではない！
これはあくまでも、人間としての尊厳を取り戻し、死守する為の偉大なる聖戦なのである！
人間の尊厳を死守する為にパンチラを望むと言うシチュエーションがどうかと言うとまぁ色々とアレな事は間違いないが、方向性としては間違っていないはずだ。
僕があの白い布地（確定）を目撃したのは完全に不可抗力で、それもどっちかって言うとあんな体制で座っていた葵の不注意こそ責められるべきで、僕はむしろ見たくも無い物を見せられたかわいそうな被害者としての立場を主張しても何の問題も無い状況であったはずなのだ。

なのに……

「みー君、これそっちに運んでおいてね？」と、初音がどこか心持ち冷たい目線で僕に言う。
「いや待て、その大きさのダンボールを一人で運べるはずが無いだ

ろう」
「ん？んんーー？そんな我侭言っちゃうと葵ちゃんにちゃんと仕事して無かったって言いつけちゃうよー？」と、宴が追い討ちを掛けてくる。
「いや、いやいや、僕にはそもそも物理的加重限界と言うものがあってですね……」
「男の子だもん、それぐらいの分量大丈夫だよねー。葵ちゃんのパンツ覗いたんだもんねー？」
なのに、なんで僕は親の敵のように、いつもにも増してコキ使われているのだろう……？？

＊＊＊

僕たちが図書館にたどり着いてみると、既にそこはちょっとした本のスラムみたいになっていた。
普通なら書架に収められているはずの数十万の書籍は、大地震でもあったかのように床や通路や閲覧机の上に溢れかえり波打っている。本の上に本が積み重なり、その更に上に板が渡されて本が積み重なり、ダンボールに詰めた本の上に詰まれた本の上に積み重なったダンボールの上に本が並んでいる。
本と言う単語がゲシュタルト崩壊を起こしそうな、完全な無秩序状態である。
本のジャングルの様になってしまった館内の僅かに空けられた獣道のような細いスペースを、何人もの図書委員や図書館職員、利用者がうろつきまわり、あちらからコチラへ、コチラからあちらへ、中から外へ、外から中へと書籍を運搬していた。それはある種、群体としてのアリのコミュニティがそうであるような、個別で見るとまったく無秩序であるが、全体としてみた場合に大きな流れを感じさせる光景だった。
そもそも、この水無瀬中央図書館が図書館の体裁を成さなくなっ

てしまったのは、夏休みがあけて新学期に入った頃、新しい図書館長さんが赴任してきてからである。

水無瀬中央図書館（と言っても村には図書館は一つしかないので、皆単に図書館と呼んでいる）は村の予算と高校の母体である学校法人の予算で建てられた、村と学校共同の図書館である。元々水無瀬高校にも辛うじて図書室と呼べるものはあったのだが、増加の一途を辿っていた生徒数に対応できるだけのものではなく、図書館として新設する際に、村の図書館を兼ねて共同で運営することになったのだとか。

主に土地的な問題もあって学校の敷地内ではなく市役所の側に建てられており、学校の図書委員と、地方公務員である司書さんが管理して居るのだが、これがもう、欠陥図書館の代名詞のような場所だったのだ。

設立された時に、元々の水無瀬小学校、中学校の蔵書のみならず、村にあったありとあらゆる古文書だの郷土史だの小説だの雑誌だの公文書だのがよってたかって放り込まれた結果、図書委員ですらどこに何が有るのか良く分からない迷宮図書館となってしまったのだ。

１０年近く掛けてチマチマと蔵書の整理と分類を続けてきたらしいのだが、こんな寂れた寒村にあるのがおかしいぐらいの規模を誇るこの図書館を整理するにはとても人手が足らず、むしろ年々寄贈やらなんやらで蔵書が増え続けた挙句に、ついには本当の書の迷宮と化した。

流石に図書館が設立されてから購入した本や、設立後に寄贈された本などはちゃんと管理されて検索システムで探し出すことが出来るのだが、創設時に持ち込まれた本は、もはやどこに何があるのか全く分からない始末。更には、初代の図書館長が計画性を放棄してとにかく奥から順番に詰め込んで言ったお陰で、奥に行けば行くほど混沌とした様相を呈する、不可侵領域が出来上がってしまった。

そんな状況にも拘らず、古文書を初めとして、創立時に持ち込まれた書籍の中には結構なお宝本も含まれていたようで、好事家やら

郷土史家やらが任意で発掘作業に取り組んでは、時々稀覯本を再発見したりしている。
まぁ、そんなこんながありまして、夏休み明け、二代目図書館長にして人が良いだけが取り柄なすだれハゲのオッサン（八鐘（やがね）図書館長）は、ついに解雇されてしまった訳である。
悪い人ではなかったが、悪い人ではないと言うだけで全くの無能だったオッサンの将来に幸あれ。

ともあれ、新しく赴任してきた三代目図書館長さんは到着早々混沌極まる図書館の状況にあきれ返り、一念発起して、蔵書の総点検と再配置計画を発案した。
最初は3人の司書と二人の図書館員と15人の図書委員で始めた蔵書総点検作業（通称棚卸し）だったが、たった一週間で図書館長の目論みが全く持って甘かったと言うことが判明する。奥から蔵書を運び出すたびに新しい古文書だの稀覯本だのが発見されるお陰で作業は遅々として進まず、このままではそれこそ5年なり10年立っても作業が終わらないことが明白に成ってしまったのだ。
業を煮やした三代目図書館長は、年度の予算組みから全部白紙に戻し、専門業者や古書の専門家まで招集して、まずは蔵書の目録作りから始めた訳であるが、毎日毎日本を運び出してはチェックして目録をつけてタグを付けてしかるべき場所に戻すと言う作業を続けても、さっぱり終わりは見えてこない。
そこで、猫の手も借りたい図書館長様からの依頼で、こうして僕たち「フラタニティ」が奉仕労働に借り出されたと言う訳である。

＊＊＊

「とは言うものの、こりゃ今年中になんて絶対おわんねーな」
「終わらないね……」
「それどころか、今世紀中に終わるかどうかも怪しい」

「今世紀はまだ９０年以上残ってるよ、みー君」

２時間ほど肉体労働に精を出し、すでにクタクタに疲れ果てて、僕と初音は自動販売機の前の休憩スペースにへたり込んでいた。

この二時間でやったことといえば、２０箱ほどのダンボールに本を詰めて外の倉庫に運び出し、倉庫からチェックが終わった本を運び入れただけなのだが、それだけでもう一日分の労働としては十分な気がするほどである。

男の僕でも重労働なのだから、そもそも腕力など無いに等しい初音は会話をするのも億劫なぐらい疲れて居るようだった。ジャージに着替え、ロングヘアーをポニーテールに束ねて首からタオルを掛けた初音は、アクエリアスの缶を持ったまま、がっくりと頭をたれて燃え尽きてしまっている。

宴は二時間フルで働いてもまだまだ元気一杯に飛び回っており、やっぱり武道をやっていると根本的な部分での体力が違うのか？とても、ついていけるものではない。

僕は遠望できるロビーの方を出たり入ったりする学生やら業者を眺めながら、ペットボトルの伊右衛門を傾けた。

「コレ後どんだけやれば終わるのかな？」

「一ヶ月ほど作業して、まだ一階のＣＡブロックも終わってないみたいだし……2年ぐらい掛かるんじゃないかな……」

この図書館は二階構造で、Ａ～Ｚまでのブロックに分かれている。吹き抜け構造で、二階部分は一階ほどの面積は無いとは言うものの、確かに、このペースでは2年以上掛かるだろう。

専門の回収業者や引越し業者まで動員してこれなのであるから、整理が全て終わるよりも、図書館の予算がなくなる方が先になりそうな勢いである。

「んで、今日の作業はドコまでやれば終わるのよ」
「ＣＡブロックのミからモまでを片付けるって話だから、まだ後２時間ぐらい掛かるんじゃない？」

洒落にならない。死ぬ、間違いなく死ぬ。体力が尽きるか、不注意で大量の本の滑落にあって生き埋めになって死ぬ。
とっととサボって逃げ出したいのは山々なのだが、どうにも初音もそんな僕の気配を薄々と感じて居るらしく、ちっとも目を離してくれようとしないのだ。まったく、勘の良い奴である。
そもそも、初音とは僕が高校に入学してからの仲だから、まだ半年ぐらいしかたっていない。その半年間で確かに結構色々遊びまわりはしたが、それでも、初音の相手の雰囲気や空気を読むスキルはかなりの物だった。
多分、相手の事をちゃんと理解して立ち回ろうとするタイプの人間なのだろう。僕は逆に表面上で仲良くさえできれば相手の深い所になんて踏み込みたくはないタイプの人間だが、初音は真逆で、相手の本心とかをちゃんと理解していこうとする節がある。
それでいて、別にズケズケと物を言ったりこっちの心の中に踏み込んでくるような感じでもなく、じっとこちらを観察して読み取ろうとするのである。
そう言う意味では、初音が何を考えているのか分からなくて怖い事も、たまにある。
しかしまぁ、全体的に言えば、初音は良い友達だった。
気さくに付き合えるし、葵みたいに暴言をぶつけてくることはないし、宴みたいに腕力でねじ伏せてくることもないし、何よりお嬢様で美人だ。そう言う女の子が友達に居ると言うのは気持ちの良い事だったし、「フラタニティ」の仲間として受け入れ、接してくれる距離感は今の僕にとってはとても有り難い。
まぁ、ある意味、僕は初音が居るからこそ「フラタニティ」の活動が続けられているのかもしれない。こいつが各所でフォローして

くれなければ、僕はとっくの昔に葵と血で血を洗う大抗争に突入していたことであろう……勝てる気はしないが。

が、しかし。

こいつがとても良い友達であると言うことと、僕がサボると言うことはまた別の問題である！

僕がサボるのは僕がサボりたいからサボるのではなく、僕がサボると言う事でこの過酷な労働を押し付けてきた葵に対して抵抗の意思表示をすると言うことにその意義が有るのである！

自分で言ってて果てしなくウソ臭いね！

いや、違うんですよ。もう、ここ最近の肉体労働の積み重ねで、僕の精神と肉体は極限まで疲労している訳ですよ。この辺りで少しなりとも休息をとらないと、シルバーウィークが明けたばかりだというのに、早々にギブアップしてしまう恐れがあるのだ。

と言うか、シルバーウィークも休む所じゃなく色んな事に借り出されていた訳だし。

そうとなれば、これ以上貴重な午後の昼下がりを過酷な肉体労働に費やす必要はない。

僕は、抜け出す隙を探りながら、大きくため息をつきながら脱力した。半ば疲労感のアピールであるが、実際の所疲れ果てて居ると言うことに嘘はない。

「流石にもう体力の限界だ……」

ワザとらしく床に目を這わせていると、ソファーが軽く音を立てて軋み、横に初音が移動して来る気配がした。そして、初音の両膝が視界に入るや否や、僕の頭に初音の手が置かれる。いきなりの出来事に動転して顔を上げると、初音が微笑みを浮かべて僕の目を見つめていた。

「みー君は頑張ってるよ。大丈夫、ちゃんと見てるよ」

ゆっくりと僕の頭を撫でながら初音の放つ柔らかい声が耳朶を打つ。

それは、僕が葵に向けたのと同じ台詞だったが、込められている感情は段違いだった。隣に座る初音のほのかな温もりが、距離を飛び越えて心の中に伝わってくる。

……マズい。

何この罪悪感。どうやってサボろうか考えて居るときに、女の子に慰められるとかものすごいダブルバインドなんですけど。この期に及んでただ単にサボりたかっただけとはとても言い出しにくい雰囲気が物凄く醸成されていっている。

ゆっくりと頭を撫でる初音は、多分弟でも慰めて居るような気持ちなのだろうが、それでも優しさが十分に伝わってくる。

どんなに自分が疲れていても、相手にはそうやって優しくできるのが初音なのだ。空元気を見せたり、必要以上に明るく振舞ったりはしないが、疲れているときは同じように疲れて隣に居てくれる、そう言う奴なのだ。

あぁ———こいつは本当に良い奴だなぁ……

ずいぶんと心が温かくなり、あっさりと前言を撤回してもうちょっと頑張ってみようかと思い直しかけていた僕を救った（堕とした？）のは、ホールの入り口の方から投げかけられた、聞き覚えのある声だった。

「おやおや？いつもながらラブラブですねぇ。公衆の面前で見せ付

けますね？」

猛烈な勢いで立ち上がり、飛び跳ねるように初音から離れて声の方を見ると、案の定、そこには篠原美夜子（しのはらみやこ）が居た。

＊＊＊

篠原は僕と初音のクラスメイトで、我がクラスの図書委員でもある。三つ編眼鏡と言う、凄まじくレトロなスタイルでいつも図書館をうろついているが、どうやら篠原に言わせると「図書委員たるもの、三つ編と眼鏡は正装です！」と言う事らしく、実際の所図書館に居る時以外は三つ編も解いているし、そもそもダテ眼鏡である。

それは図書委員と言うよりも委員長の正装なんじゃないか、と突っ込みたくてしょうがない所であるが、まぁ、他人様の趣味に口出ししてもまったくもって不毛なので、友人連中は揃って篠原のそんなこだわりは見て見ぬフリをして居る。

他にも、「図書委員たるもの休み時間は文学を読まなくてはいけない」とか、「図書委員たるもの、古文の成績は良くなくてはいけない」とか、分かるような分からない様な自分ルールを数多く設定していて、ちゃんと休み時間は友達と話をしながらも文学小説を手放さなかったり、国語の成績は学年トップクラスを維持していたりする。

入学当時からそんな感じで「図書委員」をやっていて、そういう篠原の態度が演技なのか素のキャラクターは誰にも分からず、篠原自身も図書委員キャラを演じるのを楽しんでいるらしいので、まぁ、つまりは変わり者なのだ。

「図書館は逢引の場所じゃないですよ？」篠原がそう言って笑う。

「ジャージに埃まみれで愛を語るほど汗臭い青春は送ってねーよ」

「またまたー、柏木君の青春はいつも汗臭いじゃないですか」

篠原は、誰に対しても丁寧語で応対する。年下に対してだってそうで、これも一つのキャラ作りなのだろうか？
「そもそも僕って青春送れてるのかねー……？」
「そりゃもう、真っ盛りですよ」
「真っ盛りですか」
「盛りがついちゃってます」
「いや、そこまでの危険領域には達してねぇよ！」
「こうして、昼間から公衆の面前で彼女とイチャつきながら、それは説得力が無いですよ？」
「いや、彼女じゃねーから」
「誰が？」
「誰が？って、初音がだよ！他に誰が居るんだよ。別に付き合ってねーし！」
「またまたぁ。テレなくてもみんな知ってますよ？」
「風評被害だッ！」

……以前から薄々とは感づいていたが、クラスの連中の中では僕と初音が付き合っている事になってしまっているらしかった。
確かにここの所毎日のように初音と一緒に出歩いているような気がするが、それはあくまで「フラタニティ」の活動の為で、別に甘酸っぱい青春を謳歌する訳ではない。それどころか、むしろ葵の無理難題をクリアする為に全力投球を余儀なくされている現状においては、初音とどうこうなると言う余地等これっぽっちも残されては居ないのだ。
「フラタニティ」の内情を知らない連中からは、僕の現在の立ち位置はさぞハーレムに見えることであろうが、僕はあえて声を大にして言いたい。
今の僕の居る場所は、生き地獄だ！
とにかく、噂を噂のまま放って置いて、クラスの男子どもの嫉妬と怨嗟を煽ると言うのも、ちょっと優越感に浸れて面白いような気

もしたが、残念ながら僕と言う男はこの上なく正直さと真実を重要視する男なのだ。
この際、僕と初音が恋愛関係には無いということをはっきりさせておかなくてはならない。

「残念ながら、健全な高校生男子としては誠に遺憾極まる事態ではあるが、初音は僕の彼女では無いし、僕は初音の彼氏ではない。無いんだよ……！！」
「……じゃぁ、いっそ付き合っちゃえば良いんじゃないですか？」

言うに事欠いて、とんでも無い事を言い出しやがった。

「なんかいつもお似合いっぽいし。別に二人とも恋人居ないんでしょう？」

お似合いっぽい……か。
まぁ、確かに今の僕と初音の関係を離れた場所から見たら、お似合いで良い感じに見える・・・・・かもしれない。これまでの半年間で、初音と付き合う事になったら、と言う健全な高校生男子なら誰しもが考えるような妄想をした事は一度や二度ではない。
しかし、僕らが出会ってからの半年間で、伴に経験した様々な出来事が、僕と初音の関係を「仲の良い友達」という所でほぼ固定化してしまっている。僕らの距離感は、いつしか自然とそうなったものではなく、僕たちが自分の意思で保っているものなのだ。
あるいは、どちらかが意地を張るのを辞めれば、僕たちはもっと分かりあえるのかもしれない。お互いに素直になれば、些細な点など解決できるのかもしれない。
でも、そう言う風にお互いに歩み寄っていく為にはそれこそまだまだ時間が必要で、時間が必要だと言う事に関しては、僕も初音もお互いにちゃんと理解していた。

「んーーー、まぁ、そのなんつーか、僕と初音はそう言うんじゃないんだ……なぁ？」

最後の確認は初音に向けたものだった。

この時、僕はあるいは初音が否定してくれるのを期待していたのかもしれない。「そんな事無いよ」と、にっこり笑って僕の思い込みを打ち消してくれるのを、妄想していたのかもしれない。

だけど、現実には初音は少しはにかんで、小首を傾げただけだった。

「ふぅん、まぁ、良いですけど……」

不承不承、といった感じで篠原が頷く。良くは分からないけど何か事情があるのは把握したので、とりあえず今日はこれ以上踏み込むのはやめておく、といったニュアンスの表情だった。

――――実際の所、僕だって本当の意味で分かってはいないのだ。僕と初音の間にある大きな壁。そこに有ると言う事は分かるけれども、まったく見えも触れもしない障壁。それが、一体何なのかと言うことを。

だけど、僕が薄々感づいていて、初音が明確に否定しないその感覚をあえて言葉にすると、恐らく……初音には僕ではない好きな人が居る。そして、その人はどこかに居なくなってしまったが、初音は今でもその人のことを想い続けている。

初音は好きな男（もしくは前の彼氏）が居なくなったからといってさっさと別の男に鞍替えをするようなタイプでは無いし、もちろん二股をかけるようなタイプでもない。だから、その人のことが心のどこかにある限り、別の男が彼女の心の中に入り込む余地は無いのだろう。

だから、僕も必要以上に初音の心には立ち入らない。初音も、必要以上に僕に心を開かない。
それが、今の僕と初音の関係なのだ。

にわかに生まれた気まずい沈黙が僕らの周りを支配し、やがてその空気に耐えられなくなった篠原が、勤めて明るく口を開いた。

「ちょっと、毬瀬さんをお借りしてもいいですか？」
「いや、だから僕と初音は何でもねーし、僕に確認取る事でもねーよ」
「友達として、お手伝いしてもらっても良いかって事ですよ」

それだって初音の意思問題で僕には関係ないだろ、と言いかけて、僕はその台詞を飲み込んだ。そこまで言うと流石に自意識過剰すぎな気がしたのだ。女の子の間では、お互いの友達を連れて行くときにそういう言い方をする事ってあるしな。
だから、僕は答える代わりに軽く肩をすくめて見せた。そして、初音のほうに目をやると、軽く頷く。
一瞬だけ視線が絡まって、初音は直ぐに笑顔を浮かべた。そして、立ち上がって篠原に向き直る。

「運ぶのを手伝えばいいの？」
「んー、それもあるんですけど、ちょっとＳＱＬの入力を手伝って欲しい事も有って」
「いいよ、受付だよね？」
「そうです」

初音は篠原の抱えていた本を半分受け取ると、僕の方を振り返った。そうして、ずいぶんと不安そうに、僕を見つめる。

「……大丈夫だよね？」
「なにが」
唐突に投げかけられた初音の質問の意図を読み取れず、アホみたいに問い返す僕。そんな僕を上目遣いで見据えながら、何か言いたげに口元を噛み締める初音。
……ははん、こいつ、目を離した隙に僕がサボって逃げ出すんじゃないかと思ってやがるな？
「心配するな、もちろん大丈夫だ」
僕はにっこりと笑顔を返す。僕は、初志は貫徹するタイプの人間なのだ。多少の感情の揺れがあったとしても、やるべき事はきっちりこなす。
そんな僕の力強い返事を、まだ少し疑念が残る表情で見つめた後で、「じゃぁ、また後で」と言って初音は微笑んだ。そうして、篠原の方に目配せすると、二人してきびすを返してホールの方へと向かって歩き出す。
篠原と初音のふわふわと揺れるスカートを手を振って見送った後で……
当然、僕はサボって逃げ出した。

－３－

太陽は夕方に傾いて、山の稜線に向かってゆっくりと沈み込んでいる最中で、僕が水無瀬村の一日で一番好きな時間がやってこようとしていた。
信州の山々に閉ざされ、狭い土地にしがみつくようにして田畑と住宅が点在する水無瀬村だが、太陽が山間に沈みこむ前の一瞬、木

々や稲穂に反射するその光は本当に美しいものだと思う。早い所ではもう刈り入れが終わってしまっている田もあるが、殆どの稲穂は黄金色に輝いて頭をたれており、本格的な収穫を待っている。
村の中心を流れる水無瀬川の流れも緩やかで、日の光を反射して眩しい位にキラキラと輝いている。
それは、僕が昔から想像していたような、理想的かつ伝統的な日本の農村風景だった。
僕の生まれ育った東京の杉並区と言えば、２３区の中でも屈指の人口を誇るベットタウンだけど、西には武蔵野市や西東京市が控えると、いわゆる２３区のどん詰まりでもある。基本的には都心に働きに出る人たちのベッドタウンで、場所によっては本当に住宅地しか存在せず、まったくもって面白みが無い場所なのだ。
もちろん、西武線や中央線の駅の側はそれなりに発展しているものの、その三つの路線（西武線は新宿線と池袋線の二本あるのだ）にはさまれた中間地帯は、コンビニすらろくに無い、住宅の大海原といった感じである。
そう言う場所に生まれ育った僕にしてみれば、中学までは我慢して地元に通ったのだから、高校ぐらいはせめて都心の賑やかな所に出て、放課後には池袋や渋谷で遊びまわって青春を謳歌するつもりだったのだ。
しかし、中学3年の夏、いよいよ志望校の絞込みにはいろうと言う時期、両親から告げられたのはあまりにも過酷な事実だった。

「お前、長野の高校に行くから」
「……は？」

リビングに呼び出され、並び揃う両親に嫌な予感を覚えながらテーブルに着いた僕に向かって告げられたのは、「行く気はないか？」でも、「行ってみたらどうだ？」でもない、「行くから」という断定系の通達。

完全規定路線。議論の余地無し。
いつも通り、そう言う台詞を口にするのは母親で、小説家なんていうのを職業にしている割には自己主張の少ない父親は、なにやら困ったような難しそうな表情で腕組みして黙っている。母親に先導させて居るのではない。完全に母親に押し切られて、言いたい事を言えなくて我慢している時の顔だった。

「いや、だからお前は長野県の高校に行けっつってんの」
「なんで！！！？」

タバコをくゆらせながら冷徹に告げる母親に、僕は状況が理解できず混乱する。が、とりあえず、混乱しているなりに怒声は張り上げてみた。

「いちおー、前に言ってた志望校もランク的には安全パイだろ！？てめぇがランク上げろっつーから、それはもう血を吐く勢いで今もジュケンベンキョーに精を出してた訳ですよ！？」
「嘘付け、エロサイト見てただろうが。無線ＬＡＮのアクセスランプ着いてんのはバレてんだよ。後、母親をお前呼ばわりすんなエロガキ」
「し、調べものをしてたんだよ！！！いや、問題はそこじゃなくて、なんで今更志望校変更して長野の高校になんて行かなきゃなんねーんだっつー事だよ！！」
「ねーちゃんが通ってたトコだから」
「……はぁ！？」
「お前のねーちゃんが通ってた所だからだよ。学費安いし。アタシの知り合いも居るし」
「全部お前の都合じゃねぇかよぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

話し合いは三日見晩続いた。いつもながらまったくの交渉の余地

が無い母親を、脅しなだめすかし説得し泣き落とし、志望校の情報を開示し成績表を持ち出し担任まで引っ張り出しての抗戦を繰り広げたのだが、まったくもって効果なし。

最終的には舌戦がインファイトに代わり、母親に半殺し寸前までボコボコにされた僕は、結局秋に水無瀬高校に入学願書を提出する事になった。

そして春、全身に絶望感を湛えたまま、水無瀬高校の制服に袖を通す事になった訳である。

そんな訳で、まったく望まざる高校に、しかもコンビニどころか商店すらロクに無い田舎に放り込まれた僕の入学当時の精神状態たるや、それはもう荒んだ物だった。なんか、必要以上に人生に絶望して不貞腐れていたような気さえする。

入学早々あれやこれやの騒動を引き起こして、結果として「フラタニティ」に入会し、初音たちに出会うことによって何とか精神的平衡を取り戻したのはいいものの、代わりに待っていたのは葵から酷使される日々と言う訳だ。

なんなの？何でこんなに女運が悪いの？前世で凄いジゴロだったとか？

まったくもって僕の意思の介入しない所で自体が進展していくのが当たり前の人生で、それでも何とか我を張ろうと頑張ってきたものの、どうにも僕の回りに居る女性は全員強すぎるような気がする。奇跡的にバランスが取れて居る初音だって、「フラタニティ」内で僕と葵の意見が対立したら、結局の所葵の肩を持っちゃったりするのだ。女性の連帯感と共同体意識は、僕ら男子には計り知れない物がある。

しかし、結局の所、僕はこの高校に入学してよかったと思っている。少なくとも、今のところは。

中学の頃に憧れたような華やかな生活は無いが、ゆったりと時間が流れる、このド田舎極まりない水無瀬村で、「フラタニティ」の

メンバーとワイワイやる日常が、結構気に入ってはいるのだ。
逆に言えば、「フラタニティ」に入っていなかったら、それこそ僕は時間をもてあましてちょっとヤンチャな方向に振れちゃって、バカな事でもしでかしていたんじゃないかと思う。まぁ、わかんないけど。
とりあえず、図書館を後にした僕は再び学校の方に戻っていた。別に学校が大好きという訳だからではなく、サークル棟のコンピュータ研（通称コンピ研）に行かないと、この近辺でまともにネットに繋げないからだ。
ゲーセンも無い、本屋も無い、喫茶店も無い、カラオケも無い、当然ながらネカフェも無い水無瀬村に置いて、僕たち学生のアミューズメントはサークル・部活が全てを担っている。ゲームがしたけりゃゲーム研、マンガが読みたければ文芸部、お茶が飲みたきゃ茶道部、カラオケがしたけりゃ合唱部、ネットがしたけりゃコンピ研、と言う訳だ。
学校は僕たちの学び舎であると同時に、放課後にはアミューズメント施設に変貌する。こんなド田舎に専業店が新規出店する望みなんてまるでなかったから、先生たちもその辺は大目に見ていて、学生の自主運営による文科系サークル・部活動は、水無瀬高校のある種の特色ともなっている。
学生は殆ど１００％何らかの部活に所属して、予算を分捕る為に活動に精を出し、放課後の校内は授業中より盛り上がるのがいつもの光景だ。水無瀬高校はその設立の過程からして「開かれた学校」を標榜しているから、学生のみならず、村の人々やあるいは外から遊びに来る連中なんかも居たりして。僕は当然ながらまだ未体験だが、秋の文化祭は近隣から結構な人数が押し寄せる一大イベントにもなるらしい。
セキュリティの面とか色々と危ない部分も有るように思われるが、その辺りは生徒会の連中が上手く切り盛りしているらしく、幸いな事に今まで問題が起こった事は無い。

もちろん、部外者がそれらの施設機材を利用する為には、公然の秘密である使用料を支払わなければならない無いが、そうやって稼いだ資金は結局他のサークルを利用するのに使われたりするので、ぐるぐると学内で資本が流動し、蓄積された資本でより機材が充実するという。アミューズメント総合施設としては理想的な発展を遂げていると言う訳だ。

まったくもって、変わった高校である。

ド田舎の割りにやたらと立派な村役場の横を居りぬけ、水無瀬川に掛かる橋の上を渡りながら岸辺で釣りをしていた友人連中に声をかけ、高校へと続く坂道を登り始めたところで、不意に携帯が振動した。僕はどうにも着信音と言う奴が苦手で、常にマナーモードに設定してある。

制服の尻ポケットから、数ヶ月前に一念発起して購入したｉＰｈｏｎｅを取り出す。黒いヘルメットを被り白いワンピースを身に付けた金髪の女の子がドーナツを齧っている、と言う良く分からないイラストの待ち受け画像の上に表示されていたのは、友人、鷲尾末摘花の名前だった。

……ちなみに、この待ち受けを設定したのは初音である。なんか好きなアニメのキャラらしい。

とりあえず掛けて来たのが初音でも宴でも無い事に安堵して、画面上のロックバーを右にスライドして電話に出る。

「ういーっす」

『よー、元気かー』

「元気じゃねぇ。だりぃ」

『お前もかー。アタシももうダルくてダルくて死にそう』

電話口の向うの末摘花は、いつも通り気力の感じられないグダった調子だった。テンションが上がると必要以上に熱血しちゃうが、

基本的にはいつもゆるーい感じに日常生活を送る、末摘花はそう言うタイプの友人である。クラスは違うしそもそも学年すら一つ先輩で、学内では会うこともあまり無いのだが、たまにお互いに電話をしてはどうでも良い事をグダグダと喋っては、ウサ晴らしをする、そう言う関係だ。

先輩なのだから本来なら僕が下手に出る立場なのだろうけど、最初に出会った時からなんだかんだでタメ口で、別に末摘花も気にはしていないようなので、結局先輩後輩を超えた友人としてそれなりに上手くやっている、と言った感じである。

おそらく、日常生活であまり交流がなく、電話でのやり取りで繋がっている仲だからこそ成立している関係なのだろう。

『この前の小テストが壊滅的だった所為で居残りテストだぜ、やってらんねー』

「勉強しねーもんなー、末摘花」

『お前に言われたかねーよ。テストで真ん中以上の成績取ってるの見たことねーぞ』

「僕の成績が張り出されたのなんてまだ中間の一回きりじゃねーか。僕はやれば出来る子なんですよ」

『でもやらないだろ？』

「やらないねー……」

高校生の愚痴といえば、大体において勉強か恋愛だ。そして、末摘花は僕に恋愛関係の愚痴などはしないので、基本的に愚痴の内容は勉強関係か毎日がつまんねー、という二択に絞られる。

毎回毎回代わり映えしない内容をよくもまぁダラダラと続けられるものだと自分でも思うが、僕は末摘花とのこう言う会話が嫌いではなかった。

末摘花は口調で分かるように、女性としてと言うよりも男友達のように接する事ができるタイプで、僕は健全な男の子であるから、

下ネタを含むぶっちゃけトークが出来る女の子と言うのが嫌いではない。僕の周りに居る女の子、つまりは「フラタニティ」メンバーだったりクラスメイトだったりは、基本的に良いヤツ揃いなのだが、良い奴過ぎて愚痴を真面目に取りすぎて親身になりすぎてしまう傾向がある。

別に、何をどうして欲しい訳でも真剣に相談に乗ってほしい訳でもないが、とりあえず愚痴りたい瞬間なんて言うのがあった場合に、末摘花は良い感じにあしらってくれる。

必要以上に親身にならない。かといって、別に否定も拒絶もしない。それが、僕と末摘花の間にある暗黙の了解だった。

『つーか、今何やってんのさ』

「図書館の棚卸しをサボって学校に戻ってるとこ」

『あー、棚卸しか。アレなー。意味ねーっつーか、無駄だと思うな。おわんねぇだろ』

「終わんないねぇ」

『八鐘のオッサン、今でもなんかグダグダと復職に向けて抵抗してるみたいだし、この前の村の集会でもやっぱやめよーか、みたいな意見出てたみたいだし、そのうちポシャるんじゃねーの、あの大掃除』

「へー、そなんだ」

末摘花も、初音たちと同じ水無瀬村の人間である。父親は有名な企業の社長さんらしく、電話口からはまったく感じ取れないが、やっぱり末摘花も良い所のお嬢さんなのだ。だからかどうか分からないが村の中での出来事に関しては結構な情報通である。

「オッサン、まだ館長職を諦めてなかったのか。あんまりゴタゴタ起こしそうなタイプには見えなかったけど、やっぱリストラが堪えたのかな？」

『やー、どうだろ。皆も意外だなーつってるよ。まぁ、確かに５０絡みでいきなり仕事無くなったらビビるとは思うけどさ。娘さん確か大学生だったと思うし』

大学生の娘を抱えてリストラ。もし僕がその立場だったらビビるどころの騒ぎではない。ゴネて復職出来るなら、国とだって争うだろうさ、そりゃ。

『それよりもどっちかって言うと、新しい館長、何つったっけ、天野だっけ？あの人が結構色々と強引にやってるのがどーなのよ、みたいな話っぽい』

「ふーん……この村、割りと進取なトコに関しては大雑把っつーか、融通が利く部分も有ると思ってたんだけど、やっぱ外から来た人が思い通りにやるのには色々と抵抗があるのか」

『図書館に関してはなぁ。あそこは土地から蔵書から、権利関係が色々とフクザツだからなぁ。アタシも良くは知らないけど。独りでどうこうできるようなレベルじゃねーみてーよ？』

確かに、寄贈したらもはや口出しできないとは言え、感情論としては中々そうも言ってられないという所だろう。

「まぁ、取りやめにするならさっさと決めて欲しいなぁ。その方が楽になる」

『つっても、ずっと手伝いする訳じゃねーだろ』

「確かに三日間だけだけどさー」

『しかも、初日からサボってんじゃん』

「そうなんだけどさー……」

『まー、でもサボって正解かもなー。なにせあそこ、色々出るって言うし』

「何がだよ」

『お化けとか幽霊とか怨念とかそういうの』
「あー……たしかに出るかもなぁ……アレじゃ」
『だろー？私の知り合いも何人か夜に不気味な人影が懐中電灯持ってうろついてるの見たって言ってるし』
「人影じゃねーかよ。しかもそりゃ十中八九警備員だろ」
『ロマンがねーなー』
「ロマンの問題じゃねーよ、幽霊なんて見えるようになったら心の病いの問題だ」
『ンな事言ってっからモテねーんだよ、お前は。この村じゃ昔からそういう話は山ほどあんだぜ。いやまぁ、んなことはどうでも良いや。どうせサボってんなら、市内に飯でも食いに行こうぜ。足はアタシが出すし』
「おや、飯の誘いとは珍しいな。つーか、補修中じゃねぇのかよ」
『いや、サボるし』

こいつもこいつで中々に素行が改まらねぇ奴だ。人の事はまったく言えた義理ではないのだが。ちなみに、末摘花の足と言うのは中型のバイクで、何回か後ろに乗せて貰った事があるが、アレは中々にスリリングな経験だった。
そもそも、末摘花は結構なレベルの不良少女なのだ。幸いにして両親にはバレないように上手く立ち回っているようだが、長野でも結構有名なグループのリーダー（女番長？）みたいな事をしているらしく、今時貴重種に指定されても良いぐらいマジメに不良をやっている。いわゆる一つの大人への反抗、若者の無軌道な青春って奴だ。
具体的にはどのレベルでの不良なのかはあえて聞かないが、言動を見るに精神のバランスはそれなりに保っているようなので、本当の意味でヤバい処には手を出していない……と信じたい。
「んー、中々魅力的なお誘いだが、今日は辞めとくわ」

サボりはともかく、市内まで遊びに行ってたとバレたら、流石に葵に殺されかねない。しかも、その相手が末摘花だと知られたら、あるいは死んだ方がマシだと言う目に合わされることは必定である。昔からの因縁だかお嬢様同士の確執だかなんだか知らないが、葵と末摘花はものすごく仲が悪いのだ。

『んー、わかった』

別に末摘花の方も他意はなかったようで、あっさりと引いた。まぁ、末摘花が本気で行きたかったんだとしたら、僕を誘うまでもなくとっとと出掛けているか、もしくはバイクに乗って目の前に現れて強引に拉致するだろう。

『んじゃまぁ、今度またタイミングが合ったら行こうぜ。地酒の美味しいお店見つけたんだ』
「いや、それは問題発言だ！」

年齢的にも、ドライバー的にも。

『固い事言うなよー。お前はアタシの保護者かよ』
「いや、友人だからこそきっぱりと止めさせてもらうぞ！！」
『いーよいーよ、じゃぁ飲みの時はさそわねーもん』
「そもそも飲むなッッ！！」
『うっせー、酒も飲めずに何が人生だー！』
「おっさん臭い！！！」
『可憐な女子高生ですぅ！』
「お前の何処を探しゃそんな素養が隠れてんだよ！？」
『……スカートの中とか？』
「発言がおっさん臭い！！」

いつか間違いなくコイツは飲酒運転で捕まるか、ガードレールから飛び出し風になってしまうに違いない。もしその時が来たならば、僕はハラハラと落涙しながら、墓石に清酒でも掛けてやることにしよう。そうして、胡坐をかいてしゃがみこみ、タバコに火をつけてそっと線香の横に手向けるのだ。

……末摘花がタバコを吸うかなんて、全然知らなかったけれど。高校生の分際でバイクを乗り回して飲酒するような危ない女はタバコも吸うに違いない。そうでなければいけないのだ。多分。

まぁ、まず事故る事を想定する前に、バイクのガソリンに砂糖を混ぜるかマフラーにジャガイモでもを突っ込んでやった方がきっぱりと末摘花の為のような気もしないではなかったが、流石にそこまでする勇気を僕は持ち合わせてはいない。

そもそも、僕は僕自身よりも何割か増しで、末摘花の自制心を信じていた。

この時はまだ、信じていたのだ。

【ＡＣＴ０１】その２へ続く

【ACT01】フル・フラタニティ～その2（前書き）

（承前）

【ACT01】フル・フラタニティ～その2

－4－

しばらく末摘花と生産性の無い会話を繰り広げていると、学校に着いた。3階の教室の窓から手を振る末摘花にサムアップして挨拶のようなそうで無いようなやり取りをして電話を切り、僕は道場に向かう事にした。

学校まで戻っては来たものの、既にコンピ研でネットをすると言う気分ではなくなっている。末摘花と話す事で、何がしかの心境の変化が僕の中で起こったのだろう。ダラダラとネットで暇を潰すよりも、誰かと遊びたい気分になったのだ。

ウチの高校は基本的に運動部よりも文化部の方が活動が活発であり、部員も多い。帰宅部が基本的に存在せず、軒並み文化部に流れているのだから当然ともいえる。運動部は屋外が陸上と野球とサッカー、屋内はバスケットボールが唯一盛り上がっているぐらいで、他は一応存在はするものの3~5名ぐらいで細々とやっている感じである。

我が相棒にして悪友、関屋真木が所属する剣道部もそんな弱小運動部の一つで、部員は関屋を含めて3年まであわせてたったの4人である。三年生が一人に、2年生が一人、そして1年生が二人。まぁ、運動部を選ぶ事自体が少ない上に、剣道なんて言う汗臭いものを選ぶ奇特な生徒など、殆ど居ないと言うことだろう。しかしながら、一年生二人の内の片方は関屋だが、驚くべき事にもう一人は女の子である。しかも、結構可愛い。

蓼食う虫も好き好きとはよく言ったものだが、まぁ、剣道が好きな女の子が一人ぐらい居ても良いだろう。

弱小部だけあって、剣道部に専用道場は無い。学校の近所にある古武術だか合気道だか良く分からない一般の道場を柔道部と交代で

借りている。わざわざ学校までやってきて戻ると言うのもバカらしい話だが、ダラダラと電話をしながら歩いて居たら学校に到着してしまって、到着したらもはや学校で遊ぶ気に成れなかったのだから、しょうがない。

誰かと無駄話をしながら歩いていると、いつもなら絶対行かないような場所や時間まで散歩してしまうこの現象に、そろそろ誰か名前をつけた方が良いと思う。間違いなく、ヘンな脳内回路が働いてるぜ、これ。

やって来た坂道を戻り、県道に差し掛かった辺りを右に曲がると、直ぐに道場にたどり着く。集会場のような佇まいの道場の入り口には「九仗道場」というまったく流派の分からぬ縦書き変額が掛けられており、その名が示す通り、ここは宴の実家の道場だったりする。

九仗流がどういう流派なのかは宴の説明を聞いてもさっぱり分からないのだが、相手の力を利用してどうこうという感じなので、多分合気道とか柔術に近いのだろう。村の人たちだけではなくウチの学校の生徒にも門下生は多く、学校に格闘技系のクラブが殆ど無いのは、体を動かしたい奴は大体この道場に通うからだといわれている。

宴の実家でもあり、何回か体験入門と称してコッテリ絞られた事もあるので、僕としては割りと馴染みの場所である。玄関先で胴着を着て竹箒で落ち葉を掃く顔見知りの門下生に挨拶をして、土足を脱いで道場へと上がりこむ。

３０畳ほどの道場は、いつもと違い落ち着いた雰囲気だった。

放課後は基本的に部活に使わせてくれる時間だが、空いているスペースでも門下生が柔軟だの基礎トレーニングだのやっているので、気合やら何やらが絶える事無く、騒々しいのが通例だ。しかし、今日は半日授業で部活の時間が早まっているので、門下生がまだ集まってきておらず、数人の気合や竹刀を打ち合う音が散発的に聞こえてくるのみ。

道場の端に歩を進め、面を取りタオルで汗をぬぐっていた知り合

いの先輩と由宇ちゃん（隣のクラスの子で、女子部員だ）に会釈すると、道場の真ん中で丁度練習試合が始まった。
長身の男が二人、竹刀の先を軽く打ち合わせるようにして、互いの間合いを計っている。
前垂の名前を見るまでもなく、片方は関屋だ。構えと動きを見れば直ぐに分かる。そして、関屋と同体躯をしており、練習相手を務めているということは、もう片方は顧問の三橋だろう。いつもは国語の教師だが、一応インハイにも出た事があるというそこそこの剣士らしい。
しばし、軽く手を出しながらも深入りはしない小競り合いが続く。どちらかといえば牽制を仕掛けているのは三橋先生の方で、関屋は動きを少なくして相手を誘っているようだった。昔から、関屋はそういう打ち方をする。三橋先生もそんな関屋の癖はもう十分に理解しているだろうから、無駄に打ち込んだりはせず、隙を探して少しずつ掘削するように間合いを詰めて行っている。
そして、そんなごく小規模なやり取りがしばらく続いた後で、決着は一瞬にして訪れた。
三橋先生の牽制に合わせるようにして関屋の放った小手を払いのけ、面を打ちつけた三橋先生の竹刀は有効打範囲をギリギリ超えた部分で関屋の面に当たり、代わりに関屋の胴が入った。半歩の間合いの差で、関屋の勝ち。
よく見ていないと、三橋先生の面が有効かどうかで審判が分かれるぐらいの微妙な勝負だった。僕だって、関屋がそうするだろうと予測していなかったら見逃していたかもしれない。
それは、とても関屋らしい勝ち方だった。
残心を終え、所定位置に戻ると一礼して蹲踞する二人。そうして、更にもう一本。三橋先生が関屋を相手にする場合、実戦以外に教えれるものが無い、という理由で、二人の練習はほぼ実戦である。毎日毎日飽きもせずに打ち合っているようだが、まぁ、確かに関屋によりハイレベルな技術を教えられる講師は、この村には居ないのだ

から致し方ない。
それから更に5本ほど打ち合った後で、関屋と三橋先生の練習試合は終了した。
深呼吸しながら引き上げてきた関屋は、道場の隅で胡坐をかく僕に視線を向けてくるが、別に何を言うでもなく僕の横に正座すると、面を解いた。スポーツバックと一緒に置いてあった関屋のタオルを黙って横にブン投げると、受け取った関屋はゴシゴシと汗をぬぐう。
道場の中央では、今度は由宇ちゃんと先輩が、先ほどとは一転してどこかしかユーモラスに打ち合っていた。まだ全然様になっていない、むしろ可愛げがある太刀筋の由宇ちゃんと、ダメ出しをしながら練習相手を務める先輩。なんかこういうのも良いなぁ、とその光景を眺めながら、僕は口を開いた。

「どーよ」
「つえぇ」

関屋の返事はそれっきりだった。が、まぁ、いつもの事である。関屋と僕の会話は長台詞になることも有るが殆どは短いセンテンスの積み重ねで出来ていて、お互いにそれで大体の意図は伝わる。
今のは、「なんかお前今日はあんまり冴えてねーけどどうしたんだよ」と言う僕の質問に対して、「別に俺の調子が悪い訳じゃなくて先生の方の調子が良いんだよボケ」と関屋が返した感じである。
言われた訳では無いが、今のニュアンスには、確実に語尾に悪態が込められていた。
関屋とは、物心付く前からの仲だから、いわゆる一つの幼なじみという奴である。実家が近所で、ウチの両親と関屋のところの両親が仲が良く、気がついたらいつの間にか一緒につるんで遊びまわったり殴り合いの喧嘩をする仲になっていた。中学校までは地元の学校に進み、高校でようやく腐れ縁が断ち切れるかと思いきや、何の因果かコイツまで水無瀬高校に進学してきた。恐らく、ウチの母親

が関屋のおばさんを炊きつけたか何かしたのであろう。
今でこそ無愛想な剣道バカに成り下がった関屋だが、昔はコレでも喧嘩っ早いので有名で、温和な僕はこいつの暴走を止めるのに大変苦労したものである。竹刀やら木刀を振り回して不良どもに殴り込みをかけていたあの頃の関屋は、まさに狂犬と言っても過言ではない代物だった。なんだか気が付かないうちにずいぶんと丸くなって、スポーツで若さゆえのエネルギーを発散させちゃったりする典型的筋肉バカになっちまったが、無愛想な所だけはまったく昔と変わらない。
しばらく二人して黙って由宇ちゃんと先輩の当たり稽古を眺めていると、三橋先生が近づいてきた。面を取ると中々の男ぶりだが、生憎と彼女とかはまだ居ないらしい。居ても良さそうなもんであるが、やっぱり剣道なんかをやっていると中々モテ無いんだろう（暴言）。

「来てたか」

と、三橋先生が笑いかけてきて、「ういーっす」と僕はいつも通り返事する。

「こう頻繁に遊びに来るぐらいなら、お前も剣道部に入ればいいのに」

三橋先生の台詞に、僕は肩をすくめてみせた。

「色々と急がしいんすよ、こう見えても」
「暇そうに見えるけどな」
「まぁ、確かに今はそうなんすけど」
「中学の頃は剣道やってたんだろ？結構良いトコまで行ったらしいじゃないか」

他意なくそう問いかけてくる三橋先生に、僕が返答に詰まっていると、変わりに関屋が口を開いた。

「コイツは部活とかやんないですよ」

「そうなの？」

「バカだから」

「……おいコラちょっと待て。毎日毎日竹刀振り回して性欲発散させてるような猿に言われたかねーよボケ」

「バカだから」

「二回言った！！？コッチの台詞にリアクションを返そうともせずに二回言ったなオイ！！？」

「まぁ……バカっぽいよなこいつは」

「先生も納得してる！？」

こいつら二人はどうやら僕の敵のようだった。

「剣道なんてやってたら頭シバかれすぎてバカになるんだからな！！汗臭いしモテ無いし、良い事なんてなんもねぇんだぞ！！？」

「いや、でも関屋君の方が柏木君よりもカッコ良いと思う」

「うん、柏木より関屋のほうがモテるよな、実際の所」

いつの間にか練習を終えた由宇ちゃんと先輩までもが関屋に加勢してきた。

これは……まさか四面楚歌！？

ちくしょう、ちょっと剣道の悪口を言ったぐらいで取り囲んで糾弾するなんて、剣道部員のクセに心身の修行が足りてねぇ奴らだな！！これこそまさに剣道なんて言うものに精を出しても決して人間性が向上しないと言う良い証拠じゃないか！？

……どちらかと言えば僕がバカな証拠の方をさらけ出していると

言う気もしないではなかったが、人間、細かい事を気にし出したら負けである。他人に優しく、自分にはもっと優しくと言うのが僕のモットーなのだ。

昔の人は言いました、「心に棚を作れ」と。

しかしながら、所以なき誹謗中傷をこのままにしておいては僕のこの学校での立ち位置がバカキャラで固定化されてしまう。誤解は早めに修正し、後背の憂いを絶っておくに越したことは無い。

僕は、関屋の隣においてあった竹刀を手にし、雄雄しく立ち上がった。

「そこまで言うなら仕方が無い。剣道で勝負つけようじゃないか！！」

「うわー、バカだ」

「本当にバカだこいつ」

好きなだけ嘲笑うが良い！！貴様らがこれから体験する真の恐怖を味わった後でも、そんな小生意気な口が聞けるかどうか楽しみで仕方が無いわ！！！

「誰でも掛かってこいやぁぁぁぁぁぁ！！」

———こうして、昔とった杵柄を思う存分発揮し、僕は三橋先生を始め剣道部員の全員からボコボコにされてやったのでしたとさ。

—5—

「痛い」

「ボケ」

「体のあちこちが痛いんですよマジで」

「死ね」

マジで洒落になんねぇ。あいつら本気で掛かって来るんだもん。素人に対する思いやりとかそう言う手加減を知らないのだろうか？そんな事だからいつまで立っても部員が増えないのだと言うことを、声を大にして言いたい。友愛の精神が最近の流行なのだと小一時間説教したい。

しかしながら、剣道部員を並べて説教をかまそうにも、現実問題として久しぶりに労働筋肉以外を使った僕の体はもはや限界まで乳酸が貯まって、硬直死寸前の所まで来ていた。

大体、よくよく考えるまでもなく、図書館の棚卸しでなけなしの体力と筋力を消耗し尽くした後だったのだ。端から勝ち目などなかったのだ。

それを知った上であいつらは僕をカモとして痛ぶってくれたに違いない。まったくもって大人気ない連中だ。が、とりあえずはあちこちにシップを貼ってくれた由宇ちゃんの優しさに免じて今日のところは勘弁してやろうと思いながら、部活を終えた関屋と連れ立って道場の玄関まで戻ってくると、制服に着替え、カバンを両手で保持した初音が、下駄箱にもたれかかるようにして佇んでいた。

ヤバイ、すっかり忘れてた。超怒ってる。

いつもの笑顔ではなく、ふくれっつらでこちらを見つめてくる初音を見つけるやいなや、僕は全力で関屋を指差した。

「僕は嫌だって言ったのにこいつが無理やり僕を練習台に！……うッ！！」

右ふくらはぎにちょっと洒落にならないレベルの鈍痛が走ったが、どうやらローキックをぶちかましてきやがったらしい関屋はとりあえず放って置いて、初音の目を見つめる僕。

視線を外したら負けだ。獣を相手にする場合は、視線を外さずに気合で相手を押し込めるのだ。

苦痛に潤む僕の目を真っ直ぐに見据え、しばらく何を言おうか逡巡した末――――初音は頭をゆっくりと横に振った。
そうして、大きくため息をついて、下駄箱から体を起こすと、上目遣いでちょっと拗ねたように唇を尖らせた。

「……大変だったんだから」
「ごめん！」

即効で謝った。
僕は必要と有れば詫びだって入れられる謙虚さを持ち合わせた男なのだ。と言うか、拗ねる初音も可愛い。

「黙って抜け出すなんて酷いよ？」
「ですよねー」
「みー君が抜けたぶん、宴ちゃんと篠原さんが頑張ってくれたんだからね？」
「ですよねー」
「今度、二人にはちゃんとお礼を言っておいてね？」
「もちろんですとも！僕は他人に対する感謝の念を失った事などこれまでの人生において一度も無い男ですよ！！」

僕の精一杯の誠意が通じたのだろう（？）、初音はもう一度だけ深々とため息をついて、ようやく真っ直ぐな視線を取り戻した。
僕の後ろに視線を向け、「お疲れ様、関屋君」と微笑みかける。
「おう」と無愛想な関屋の返事に笑顔で頷いた後で、初音は改めて僕の全身を眺め回した。

「扱かれたみたいだねー」
「久しぶりにいつも使わないような筋肉使ったぜ」
「棚卸ししてた方がまだマシだったんじゃないの？」

「今から考えると、そう思わざるを得ない部分は確かにある……」
「まぁ、良い運動にはなったんじゃない？」
「アレはもはや運動じゃなくてイジメだ」
「はいはい」

僕の悲嘆を軽く受け流しておいて、初音は踵を返した。

「まぁ、今日サボった事は葵ちゃんには秘密にしておいてあげるから、ちょっとそこまで付き合ってよ」
「えーー！？いや、流石に今日はもう帰って風呂入って寝たいんですけど」
「神社にちょっと寄るだけだって。美椛（みなぎ）ちゃんが居たから、挨拶しておこうと思って」
「お、それは是非とも逢いに行かなきゃな」

何はともあれ、美椛が居るなら顔ぐらいは見に行かなくてはなるまい。

―６―

村に昔から伝わる伝説に、鬼女紅葉伝説と言うものがある。

昔々にこの村に紅葉と言う名の一人の美しい鬼女が居て、村人に習い事を教えたりして暮らしていたのだが、旅人を襲ったりするので最終的には武士に討たれて死んでしまいました、ちゃんちゃん、みたいなお話だ。

その紅葉の墓があるのが紅葉神社で、僕は知らなかったが紅葉伝説自体は能にもなった有名なお話らしく、観光客とかがたまに訪れたりする水無瀬村の数少ない観光スポットである。水無瀬村には幾つかの神社があるが、みんなが固有名詞抜きで神社と呼ぶのは紅葉

神社だけで、それだけ村の信仰心の中心に据えられているのだろう。
しかし、僕にとって紅葉神社は村の鎮守でも伝説の鬼女の墓がある場所でもなく、単に葵の実家と言う程度の意味合いしか持っていない場所だった。別に大きな社でもなく、お堂が一つに倉が一つ、社が一つと後は小さな古びた墓が点在するだけの、まったく持って見ごたえの無い場所なのだ。件の紅葉の墓にしたところで、取り立ててクローズアップされている訳でもなく、階段を上がって直ぐの所にこじんまりと鎮座しているだけで、標識が立っていなければ見落とすレベルである。
まぁ、全体的に観光スポットでは有るけれども観光化されていない場所なのだ。
初音は「寄る」と言ったものの、九仗道場は元々神社に併設されているので、道場の玄関を出たらそこは既に神社である。具体的に言えば、神社の駐車場であるが。
駐車場を抜け、鐘付き堂の下を潜り抜けて葵の実家の横を通り、社までやってくると、その向うにこじんまりとした畑が見えてくる。家庭菜園に毛の生えたようなレベルの小さな畑で、その向うは崖になっており、市役所を中心とした水無瀬村の中心部が眺望できる。
既に時刻は夕方のピークを迎え、畑の端に植えられたコスモスが日の光を浴びて赤く染まっていた。

「あ、初音ちゃんだ！」

僕たちが畑までやってくるなり、小さな人影が中から飛び出してきた。
小さな体には不釣合いな、しかし一応はあつらえたらしい作務衣を来た少女は、ダッシュで初音の前までやってくると、勢いをつけたまま抱きつこうとして、不意に自分の手が泥だらけなのに気付く。何回か両手と初音を見比べた後で、結局抱きつくのは諦めて、「えへへ」と照れ笑いを浮かべた。

葵の妹の美椛である。
可愛らしい外見からはとても想像出来ないが、このちっこいのが大きくなったらあの暴君に化けるのだ。まったく持って信じがたい。あるいは、斎宮家の連中は個体進化でも遂げているのではないだろうか。そうとでも考えんと、同種の生物だとは思えん。

「うーす」

僕がその場にしゃがみこんで美椛に声をかけると、美椛も満面の笑顔を僕に向けてくる。

「みーくんだ、みーくん！元気！！？」
「おー、元気元気。お前は」
「私はいつも元気！」

なんだかずいぶんと久しぶりな感じの挨拶だが、実際の所は一週間前に会ったばかりである。しかし、とりあえず会った時にお互いの元気を確認しあうと言うのは、美椛と僕の恒例行事みたいなもんだった。
美椛は続いて僕の横に立つ関屋を見上げ、泥だらけの右手を跳ね上げた。

「おっす、でかいの！」
「よぉ、ちいさいの」

こちらもまた、様式美な挨拶。

「……畑仕事してたのか？」

とりあえず会話の取っ掛かりにそう問いかける僕に、美椛は両手

をひらひらとさせた。泥だらけでは何を触る訳にも行かず、自分の両手の取り扱いに困っている仕草である。

「大根を取ってた。結構大きいの取れたよ！」

「そう、良かったね」、と初音が美椛の頭を撫で、嬉しそうに笑う美椛。

なんつーか、美椛小学生４年生のはずなんだけど、こうしてみて居ると幼稚園児ぐらいに見えることもあるから不思議だ。普通小学４年生と言えば、結構色々と完成しだすお年頃なんじゃないのか？反抗期とかも始まってみたりして。やっぱ、田舎育ちは純朴に育つって事なのかね？

「今日はみんなどうしたの？」

「んー、関屋と一緒に剣道の練習やって、そんで美椛が居るって聞いたから寄ってみたんだ」

「あー、さっきなんか叫び声してた。そうか、あれみー君だったんだね」

美椛はテクテクと僕に近づくと、品定めするように僕の顔を覗き込む。

「大丈夫？痛くない？」

「へーき、へーき。慣れてるから」

「そっか！」

にっこりと笑みを浮かべる美椛の頭を、僕はガシガシと撫でた。こいつはホントに可愛いなぁ。

「もーーー、みーくんやめてよーーー！」

美椛は頭をくしゃくしゃにされて嫌がるが、自分の手が汚れているので振り解こうとはしない。まったくもって、あの姉と同じ生命体とは思えないぐらい良くできた娘さんだぜ。

僕らのはしゃいでいる声を聞きつけたのか、畑の奥の方から一人の初老の男の人が歩いてきた。青袴に白衣という神職衣装をまとい、笑顔を浮かべてこちらに会釈するのは、この神社の禰宜の平野さんだった。

「いらっしゃい」

『お邪魔してまーす』

声をそろえて挨拶を返す僕ら。

平野さんは実質的な現在の紅葉神社の神主である。一応形式上は葵が紅葉神社の神職と言う事になるが、女性でしかも高校生の身の上であるから、葵には巫女は出来ても神主は出来ない。行く行くは葵が婿を貰ってその人が神主になるのだろうけれど、その間神主不在と言うわけにも行かないので、先々代より禰宜を勤めている平野さんが代役として立っていると言う訳だ。

葵自身は、さっさと平野さんに名実共に神主になってもらって、後継はどこかから派遣してもらったら良いんじゃないかと考えているようだが、まぁ、中々そうは問屋が卸さないのが田舎の風習やらの難しい所で、自分の家の事とは言え、葵の一存では決められない事もあるのである。

「美椛ちゃん、とりあえず手を洗ってきたら？」

平野さんが目を細めて好々爺然と美椛に声をかけ、「そうする！」と元気に応える美椛。

「初音ちゃん、一緒にいこ！向うにね、おっきなお花が咲いたん

だ」と初音を引き連れ、美椛は庭の隅にある水道の方へと駆け出して行った。
僕はチラッと腕時計に目を落とす。長居をするつもりはなく、挨拶したらとっとと引き上げようと思っていたのだが、まぁ、致し方有るまい。
僕は美椛と初音から視線を外すと、平野さんが右手に下げているバケツの中に入った大根に視線を向けた。

「晩御飯ですか？」
「ええ、今日は大根の田楽にしようと思いまして」
「いいっすねー」

平野さんは、葵と美椛の家政夫のような事もしている。ほぼ寝たきりに近い葵のお婆ちゃんの面倒も見ているようで、まぁ、実質斎宮家の家族のようなものだ。両親が亡くなって女子供に老人だけしか残っていないとは言え、たかが雇われ禰宜だった平野さんがそこまで献身的に斎宮家の面倒を見るのは不思議な事ではある。
昔、葵のお婆ちゃんとなにかロマンスがあったんじゃ無いか、と言うのが初音の推理（と言うか願望？）だが、事実がどうなのかと言うことは別に誰も触れない。
僕だって、逆の立場なら同じことをするだろう……いや、冷静に考えると姉だけは要らんな。

「……美椛、調子良さそうっすね」

前フリなく僕が発した台詞に、平野さんは少しだけ笑顔を曇らせた。しかし、直ぐにもとの表情に戻ると、庭の向うから聞こえてくる美椛と初音の笑い声に目を細める。

「ここ最近は、かなり良いみたいですね。お医者様も、このまま調

子が持つようなら学校に戻っても良いと仰ってますし」
「そいつぁ何より」
「それに、昨日の集会で、秋祭りで紅葉役をやる事も決まったんですよ。あの子はそれが凄く嬉しかったみたいで、今日はずっとあの調子なんです」
「あぁ、そうなんですか！ずっとやりたいって言ってたもんな。そりゃぁ、ホントに良かった」

美椛にしても、葵にしても朗報だ。
水無瀬村の秋祭りはその名もズバリ紅葉祭りなんて呼ばれているが、メインイベントは神社の巫女が紅葉として舞を奉納すると言うものなのだとか。その役割は代々斎宮家の女性が担ってきたのだが、今年の紅葉役を誰にするのかでずっとモメていたのだ。
歳経験を考えれば紅葉役は葵でほぼ決定なのだが、葵自身はまったく持ってやる気が無くゴネまくっており、逆に美椛の方はずっと憧れていたらしい。かといって年功序列をすっ飛ばして美椛でいいのかと言うと、過去の風習がどうの、前例がどうのといった面倒くさいアレコレが噴出して、中々に村の中の意見もまとまらなかったとか。
それがようやく落ち着いて、念願叶って紅葉役を演れる事になったんだから、そりゃ、確かにはしゃぐ訳だ。

「……葵さんの方の調子はどうでしたか？」

今度は、僕が不意を突かれる番だった。一瞬、平野さんの質問の意図が分からずあっけに取られた後で、ゆっくりと理解がやってくる。

「……あいつ、またしばらく帰ってきて無いんですか？」
「ええ……」

葵は、よく家出をする事で有名だった。とは言うものの、それは世間一般で言うところの家出とは異なり、単に実家に帰らずフラタニティのロッジで寝泊りしていると言う事なのだが。
アイツが自分の家をどういう風に考えているのかはよくは知らないし、村からの期待を一身に受け止める立場と言うのに嫌気がさしているんだろう、ぐらいの事は分かる。
しかし、それとここに帰ってこないというのはまた別問題だ。確かに、ここに戻ってきたら両親の事を初めとして色々な事を思い出すのも事実だろうが、だからと言って、美椛や婆ちゃんを放って置いて良いと言う問題ではないのだ。
僕らもこの件に関しては結構口をすっぱくして説教しているのだが、もちろん、僕らの忠告や説教などをまともに取り合う葵ではなし。
それに、アイツが本当に自分の中の問題を解決しないとどうしようもないと言うことは、僕たち自身が良く分かっているのだ。
だから、僕は苦言も愚痴も吐かない……吐けない平野さんの代わりに、大きくため息をついた。

「まったくもー、あのバカは……。とりあえず、後で電話しときますよ。今日の晩飯は美味そうだって」
「……そうですね、宜しくお願いします」

僕の台詞に、平野さんはゆっくりと笑みを浮かべた。その笑みに釣られるようにして、僕も笑顔を返す。

――――その時。
隣に立つ関屋が何かに打ち震えるように緊迫し、その気配に僕が背後を振り返ったその瞬間――――

僕の周りの時間が完全に静止した。

木立を透かして斜めに差し込む金色の光に照らされた参道の向う、暗く落ち込みシルエット状に浮かび上がる山門の四角い額縁の中、後背の木々の煌きに浮かび上がる暗く沈みこむ陰の様に……そいつは居た。

光を拒絶し、影の部分こそが自分の居場所であると規定しているかのような、黒い塊。

他人の理解をまったく必要としない異物としての自分を受け入れ、愉悦しているかのような存在。

外部、変質としての意義を完全に理解しているモノ。

……最初、僕には何か黒い塊のようにしか認識されなかったその姿が、やがてゆっくりと脳の中で像を結び、人の姿へと篆刻されていった。

そして僕の現実認識野に現れる、全身黒ずくめ、まとまりの悪い黒い長髪をなびかせて、両手をダウンジャケットに突っ込んだ、黒眼の男。

……何故だろう。その後何度となく目にする事になるその姿だが、一番最初に目撃したあの瞬間、確かにそこに立っているのが僕よりもはるかに歳を取った年配の男に見えた。

それは、これまでの人生で積み立ててきた気配とか佇まいとか、あるいは存在の有り様そのものが僕とは根底から違う「異質なるモノ」としてそいつを認識したからなのかもしれない。

あるいは、あの時自分でも理解できていなかった、「恐怖」と言う原始的な感情に突き動かされていたからなのかもしれない。

今でもはっきりと覚えている。

周りの空気が完全に凍りつき、木漏れ日の光線に漂う埃の粒子すら視認できそうなほど研ぎ澄まされた僕の視覚に飛び込んできたそ

いつは、口元に大きな嘲笑を浮かべていた。世の中にある全ての誠実さとか、勇気とか、正義とか、愛とか、そう言った人が生きていく上で寄り所にする、前向きで上昇する感情の全てを、冒涜的に嘲笑っていた。

果たして、僕がそいつを認識してからどれぐらいの時間が経過したのかは分からない。ただ、僕の主観的には数秒、数十秒もの時間が過ぎた後――僕は自分が呼吸を止めていたと言う事実に気付き、むせ返るように大きく息を吐き出した。

そうして、それが契機だったかのように、僕の周囲の時間が再び動き出す。

我に返ってみれば、そこにはただ黒いダウンジャケットに黒いジーンズを穿いた少年が笑顔で佇んでいるだけだった。

完全に気圧された僕たちの様子などまるで気がつかぬ風に、ゆっくりとした足取りで近づいてくると、まだ身動きの取れない僕たちに対して、少年はにっこりと微笑んでみせた。

「すいません、ちょっと見学に来させてもらいました。紅葉の墓は何処にありますか？」

「紅葉様のお墓なら、そこにありますよ」

平野さんが平素と代わらぬ優しげな声で、少年の隣にある小さな墓標を指差してみせる。少年は平野さんが指した方を振り返ると、不意に感動の面持ちを浮かべ、墓の前にしゃがみこんだ。

「おお、これが紅葉の墓かぁ！いやぁ、素晴しいなぁ！」

素晴しい、これは凄い、やっぱり見といてよかった等とはしゃぎながら少年は、きょろきょろと上下左右を見渡す。そうして、自分の背中の方に沈む太陽と、自分の影が落ちる紅葉の墓をしばらくじ

っと眺めた後で、おもむろに両手を合わせて目を閉じ、なにやらぶつぶつと呟いきはじめた。
そうして、ひとしきり真言だか念仏だか祝詞だか良く分からぬ呪文めいた文言を呟いた後で、不意に立ち上がって笑顔を向けてみせた。

「有難うございました。これで長年の夢の一つが叶いましたよ」
「そうですか」と平野さんはニコニコと会釈を返す。
「それじゃ、この辺で失礼します」

少年はそう言ってにっこり笑うと、「お邪魔しました」と踵を返す。
そうして、二、三歩門の方へと歩いた所で、ふと立ち止まってこちらを振り返った。

「所で……一つお尋ねしたいんですが」
「なんでしょうか？」

笑顔を崩さぬ平野さんに、上体だけ振り返ったまま少年が笑みを浮かべた。
……それは、先ほどまでの笑みとは異なり、口元だけが歪んでまったく目が笑っていない、とても嫌らしく気味の悪い笑みだった。

「斎宮葵さんは、今ご在宅ですか？」

「……いえ？葵さんのお知り合いですか？」
「いや、そうですか、それなら良いんです。何でもありません、有難うございました」

そう言い残すと、今度こそこちらに背を向け、少年はゆっくりと

した足取りで立ち去っていった。
門の向う、参道の階段を下りて少年が見えなくなるまで見送った後で、僕は、ようやく全身の緊張を解いた。と言うより、その瞬間まで僕は自分が緊張していた事に気がついていなかったのだ。

「な、なんなんだアレ……」

どういったものか分からず、自分の感覚の急変にも説明が付かずそう呟くしかなかった僕に、小さく、しかし深く息を吐き出して、関屋が肩をすくめた。

「観光客だろ？」
「いや、ちょっと待て、どう見ても真っ当な人間には見えなかっただろ！！？」
「そうか？俺には真っ当な人間以外の何にも見えなかったけどな」
「あぁ？頭沸いてんのかお前？そりゃ、お前みたいな朴念仁の不感症野郎には感じられなかったかも知れねーけど、どこをどうひっくり返してもカタギの雰囲気じゃなかっただろうが！」
「お前みたいな年がら年中妄想しているようなバカにしか感じ取れねーよ、んなもん」

いつもならここから長々と口喧嘩を始める所だが、どうにも先ほどの少年に毒気を吸われたようで、僕は怒気はため息となって抜けて行った。

そしてそのまま、僕と関屋は何をするでもなく、美椛と初音が戻ってくるまで黙って少年が立ち去った方を眺め続けていた。

―７―

主不在の斎宮家に上がりこみ、平野さんが淹れてくれたお茶を飲みながら皆でよしなし事をそこはかとなく語りけると、いつの間にかすっかり日も沈んで夜になっていた。

「じゃぁ、また明日ね」

河原の分かれ道、初音が手を振って笑顔で薄暗く点々と灯る街灯の向うへと消えていくと、僕は大きくため息をついた。

ため息をつくたびに幸せが逃げていくと言うなら、今の僕にはもうこれっぽっちも幸せは残っていないに違いない。と言うか、僕の人生で本当に幸せだった時期なんて言うのが在ったのだろうかと言われると、甚だ疑問である。

「疲れた……今日はマジで疲れた」

この台詞もなんか最近毎日繰り返しているような気がするが、案の定、隣を歩く関屋は実に興味が無さそうに「いつもの事だろ」と呟いた。

「いつも疲れてるけど、今日の疲れはなんかこう、質が違うんだよ！高品質の疲れと言うか、体にジットリネットリとへばりついて関節から筋肉からを侵食してきて、何で生きてるのかの人生哲学を問答したくなっちゃうような類の疲れなんだよ！」

「大体において、疲れって言うのはそう言うもんだろ」

「いやまー、そういわれれば確かにそうなんですけどねー」

山間の向こう側にはまだほんの少しだけ夕日の残滓がこびりついていたが、広い間隔で街灯が点在するだけで他に光源らしきものの存在しない県道は、いつも通りに静まりかえっていた。

学生の帰宅時間は既に終了し、出かける場所もないから、日が落

ちてからの水無瀬村は虫の鳴き声だけが刹那に響く、水底のような場所になる。
所々からたまに聞こえてくる笑い声は、近所の家々に下宿する学生たちのものだろう。

長野市内までバスで1時間、日に3本も路線の無い水無瀬高校であるから、学生の内の大半は村の中に下宿している。本来なら学生寮などを作って住居に当てる所なのだろうが、設立時に学校と村の相談で、学生の下宿先を村の家々が受け持つと言うことになったのだ。
寮などを新設しなくても良い学校にとっては願ったりだし、村の人たちも若い人を受け入れる事には積極的で、尚且つ学生の保護者にとっても、下宿先が里親としてきちんと監督してくれると言う安心感も有って、この制度は水無瀬高校の特色の一つとして広く受け入れられている。
下宿生は入学するとまずはランダムに学生受け入れ先の家々に割り振られ、相性によって下宿先を転々としていく。そのうちに自分に合った下宿先を見つけると、在学中はそこの家族として過ごしていく事になるのだ。そうして3年間を過ごすうちに、下宿先は第二の家族となり、水無瀬高校、ひいては水無瀬村への郷土愛が育成されると言う訳である。
話によると、下宿先の先輩との繋がりなんかで進学やら就職が有利になったりといった、世代を超えたコミュニティも形成されたりするらしい。水無瀬高校日影地区在学生連合会、みたいな。
そして、僕と関屋が下宿している先がどこかと言うと、学校から徒歩で２０分ぐらいの和田地区にある「あやめ寮」と言う学生寮である。
「あやめ寮」（僕等は端的に寮と呼んでいるが）は廃業した旅館を利用して作られた、水無瀬村に3つある学生寮の内の一つである。相部屋が１０個、一人部屋が5個の築３０年になるオンボロ極まり

ない木造二階建てで、僕らを含めた1年生から3年生までの合計２５名が共同生活を行っている。
入学当初、とりあえず別に他の知り合いも居ないので同宿を希望していた僕と関屋が最初に放り込まれたのがこの寮で、半年たって同僚の連中とも馴染んできた今となっては、恐らく3年後も僕の下宿先として機能している事だろう。

右手に水無瀬川と国道を見下ろしながら林道に近い下校路を抜けると、徐々に喧騒へと近づいていく。
最後の角を曲がり、寮の前まで戻ってきてみれば、相も変わらず同僚どもが宴会ともお祭りとも付かぬ騒動を繰り広げていた。
ボロボロの木造旅館の窓々からは煌々と光が溢れ、駐車場には持ち出された木造テーブルやらキャンピングセットが並び、プロパンガスボンベに直結された業務用のコンロの上で、中華ナベが振られる。運動会の時に使われるようなオープンテントの下では長いす・長テーブルに着いた先輩連中がカードゲームに興じ、レンガ造りのバーベキューコンロでは、何とも知れない怪しげなくし肉が油を滴らせ、玄関先では囲碁と将棋と麻雀卓が軒を並べている。一番道路に近い場所にある焚き火の周りには同級組みがたむろし、公には一切アルコールが入っていないとされている謎のジュースを傾けながら談笑していた。
それは、まったくもって代わり映えせぬ、寮の日常風景だった。
いつの頃から、どんな先輩が始めたのかは不明だが、夕食は皆で共同でやりくりする、と言うのがあやめ寮の鉄の掟の一つである。料理当番や片付け当番は交代制になっており、大体においてみんなで押し付けあったり貸し借りの精算道具にしたりしているが、寮長が取り仕切ることで、なんとか上手くやっている。
食材は月額で徴収される食費から捻出されるか、もしくは実家からの送られて来る援助物資を提供する事で賄っており、１８時から２１時まで、と言うアバウトな時間に戻ってくれれば、大体は何がし

かにありつけると言うシステムになっている。
あやめ寮の共同夕食（と言うか連日絶える事の無い宴会）は学生の間では結構有名で、寮生で無いにもかかわらず日参して一緒に騒いで居る奴がいたり、小遣いが苦しくなって小銭だけ握り締めて値段分の飯だけ食って帰ったりする奴がいたり、まぁ、ちょっとした夜のコミュニケーション空間として成立しているのだ。
ただ、あやめ寮が男子寮なので、参加者は基本的に男性である。たまに女子生徒が友達や彼氏に連れられてやってきたり、料理を手伝いに来てくれたりするが、その頻度はそんなに高くない。もちろん、女子が立ち入り可能なのは駐車場までで、寮自体は絶対女人禁制なのであるが。

「おー、遅かったじゃん。また部活か？」

駐車場にたどり着くなり、同僚同級連中が声をかけてきた。疲労に任せた前傾姿勢でふらふらと歩を進めながら、僕は右手をひらひらと振ってみせる。

「勤労奉仕だよ、キンローホーシ。あんなもん、部活じゃねぇよ」
「今日は何やって美少女様たちと遊んでたのよ？」
「図書館の棚卸しの手伝いだよバカヤロー」
「あー、アレかー。穴掘り穴埋めの刑罰の方がまだしも建設的なんじゃないかって言われてるアレか」
「ソレだよ、ソレ。そのうちアレ死人出るぞ。つーか、現実問題として何人か下に埋まってても既にわかんねーレベルだぞ。最終的には本じゃなくて白骨死体でも掘り出されるんじゃねーのって勢いですよ」
「まぁ、水無瀬高のヒロイン様三人も侍らせて毎日キャッキャウフフしてんだから、そんぐらい耐えときゃいーんじゃね？つーか、むしろご褒美なんじゃねーの？お前ドＭっポイし」

「ふざけんな、僕は徹頭徹尾完璧なノーマル人間だ。いい加減あいつらは女神様なんかでは無いと言う現実を直視しろ、認識を改めろ、僕に泣いて詫びろ、そして死ね」

とりあえず同級連中を蹴り飛ばしながら、寮の入り口へと向かう。

「あれ、飯くわねーの？」

「食うよ！！腹ペコだよ！！しかしその前にまず風呂入りたい。汗だくで気持ち悪い。自分から腐敗臭がする」

「あー、じゃぁとりあえず清水先輩にナシ通しといて。今日の風呂当番あの人だから」

「あいよー」

テントの先輩連中に挨拶をし、卓上ゲーム連中を冷やかしながら、靴で溢れかえる玄関を、靴を脱ぎ捨てながら猫足で踏み越える。廊下にもダベったりモンハンをしたり早くも寝潰れている学生どもがひしめき有っており、相変わらず寮生よりもその他の学生の方が多い。顔なじみの連中に挨拶をしながら、人だったり物だったりする障害物を乗り越え、自室のある二階へと上がった。

一階ほどではないものの、二階も人やら私物やらで溢れかえっており、相変わらず通りにくい事この上なかったが、半年も住んでいれば大体の通行ルートは把握しているものだ。踏んで良い物とヤバい物の違いも。

最奥の自室までの道すがら、清水先輩の部屋の扉を押し開き先に風呂に入る許可を貰ってから、ようやく僕は自室へと転がり込んだ。

テーブル代わりのコタツを中心として、僕のものと関屋のものと同僚の連中のものと、その他誰のものかも分からない書籍や小物や家電やゲームソフトが散乱する床を両足で掃き開くようにして進み、カバンを放り投げながら二段ベットへと倒れこむ。

今月は僕が下の段で、関屋が上の段である。

僕に続いて関屋が戻ってきて、電気を付ける気配がした。不意に目を刺す蛍光灯の光に、僕は枕に顔を押し付けた。

「ねーーーーみーーーーー」

横になった途端に、一気に疲労が押し寄せてきた。なんかもう、何もかもが面倒臭くなってくる。

僕たちが戻ってきたのを察したか、寮のどこかで誰かと遊んでいたらしい子猫の活計（たつき）が、ダッシュで部屋に戻ってきた。てちてちと爪が気の床を叩く音がして、カリカリと扉を押し開けた音がするとほぼ同時に、僕の背中に暖かい獣が飛び乗ってくる。

「ニャーニャー」と背中でじたばた暴れる活計を後ろ手で掴み上げ、顔の横に持ってきてガシガシと撫でていると、ブレザーをハンガーに掛けた関屋が僕にノートを投げつけてきた。

瞬発的に活計がベッドから降りて難を逃れると同時に僕の頭にノートが覆いかぶさって来る。

「とりあえず風呂入ったら飯食う前に宿題やっとけ」

「おー……」

「僕は先飯食ってくるから」

「おー……」

数瞬、関屋は潰れかけの僕を見下ろしてなにやら考えていたようだが、やがて諦めたのか、電気を消して部屋から出て行った。その後に続くようにして、活計も再び廊下に飛び出していく。

活計の爪音が遠ざかるのと、窓の向うから聞こえてくるいつもの喧騒をぼんやりと認識しながら……僕はいつの間にか、眠りに落ちた。

とりあえず、こうして、まずは一日目が終わった。

――
―――

【ACT01】終幕

＊＊＊

【幕間～intermission～】

『監視報告書　NO' 090923―a』

監視対象目標、柏木行幸（以下、対象甲）と遭遇。言動に若干の不審点が見当たるものの、被疑対象行動として特筆すべき点無し。現在、監視対象目標、水無瀬村（以下、対象乙）の定波結界に侵食無し。監視任務は順調に進展中。ただし、対象甲の動きに特筆すべき点が見当たらないと言う事は、逆を返すと本部の情報解析に齟齬が見られる可能性もある為、至急ARプログラムと対象乙の評価査定の再検査を要請する。現状において問題点が見受けられないと言うべき点こそをむしろ問題点とすべきであると思われる。

以下所感であるが、対象甲が現象の特異点であると言う想定そのものが推論の決定的なミスである可能性も否めず、家族構成、思想、経歴を含めて徹底した情報の洗い直しを行い、推論に瑕疵が無いかを検証すべきであると思われる。

明日も引き続き監視任務を続行するが、本作戦の規模・影響を鑑みるに、可及的速やかに監視員を補填し、作戦遂行を補助される事を望む。

―追記―

本当に、あの少女を抹消すべきなのか……？

―――

【ACT02】に続く

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3894z/

紅葉狩の刻

2011年12月13日06時49分発行